「辰雄日誌1925」No.9

──１９２５年１１月１日～１９２５年１２月３１日──

小池辰雄

「もし神の光のうちにすごとく光のうちを歩まば、我ら互に交際を得、また其の子イエスの血、すべての罪より我らを潔む。」（ヨハネ第一書1･7）〔独語〕

１９２５年１１月１日（日）

半晴。聖日。政美兄上よ、願わくは常に我と共に在れ。我、兄上にたずぬるとき常に正しき答を与えられよ。兄上の声は聖霊より発す。我、聖霊によりて之を兄上の声の然るを聴く。誠に聖霊によって二人は一つの祈り、一つの声となる。我が兄、我が友、願わくは地上に残されたる我を、そのいとも霊妙なる深奥なる真理なる正義なる声にて導き給え。

私は聖書から光の語を限りなく見出だす。また、私が深く聖霊に導かれて学ぶことは皆聖書の語と一致す。かくて聖書は神の言葉たることを聖霊があかしす。

神とキリストと聖霊。

三つにまして一つなる神。神、在まし給う、キリスト在まし給う、聖霊我等の中にあり。しかして之、別物にあらず、一なり。しかれどもこの三位は、一に対して各その部分をなすものにあらず。各完全なるものなり。独立のものなり。かく云うとき、これは誠に不合理、矛盾である。しかれども、もし神を思いて、キリストと聖霊を全く無関係となすときは、これはキリスト教の神となすを得ず。キリストを思いて神と聖霊を無視するときは、これ真のキリストにあらず。聖霊を思いて神とキリスト無きときは、これ聖霊と云うべからず。かく三位にして一体なりという非合理的なることは我等の信仰が深き体験によりてあかしす。けだし三位一体という不完全なる言葉が迷わすなれども、その深きは言葉の如何を論ずべきにあらずして真理にある。

聖霊と良心。

我等に固有のものと云うも、之、本は神よりたまわらで在るものはない。良心、誠に然るものなり。勿論、我等の心は悪心と良心とに別たれたものにあらざれども、心の正しき状態にあるときに、それは良心に満つる、分別、判断みな正当となるべき源たるものである。さりとて、心の正しからざるときといえども、良心は全然消えたるものにあらず。その良心にたちかえる可能性あり。この良心は人の所謂固有の最大なるものである。

人の生まれつき賜われる心は、本来はこの善なる良心にし満たさるべきなるに、さまざまの理由によりて悪分子に満たされて、その悪化の甚だしいものほど悪人であるわけである。しかして全然、性理的に精神に異状を呈していないかぎり良心が全然無いと云うところまでは行くものでない。

しかれども、良心あるを意識してこれの善なることを知りて、之に従い得ざるは「弱き人」と云うものの一般である。しかしてこの良心は──私は思う──あまりに人が固有のものとして神を忘れているために力なきことを。ここに新たに聖霊の臨み給うなくば、我には力なく生命なく、いつも罪の奴隷として罪の重荷に苦しまねばならぬのである。しかし一般の人はここまで悩まないから、なまぬるの善（実は善とは云えぬ）によって一般に生きて行ける。即ち、神より賜わりし良心に常にその塩なるところの聖霊が之に塩せざれば、良心は生き生きと積極的にならないのである。一般の良心はごまかしに打ちかたれて、ごまかしのあやつりとなって偽善となって生きている。

誠に我等の良心──真の心──心──は常にあらたなる神の聖霊に導かれ、聖霊の宿ることによって力あり、生命あるのである。

以上のことは今日午前、エペソ書を静かに読んで、書かされたことである。聖書は何と云っても偉大である。生命の泉である。

感謝なりし聖安息日の午前、静かに独りで。讃美歌を静かに、３５、３１０。

パウロの祈り。エペソ書3･16節以下、アーメン。4･1～6、22～24然り！アーメン。

「22即ち汝ら誘惑の慾のために亡ぶべき前のにける旧き人を脱ぎすて、23心の霊を新にし、24真理より出づる義と聖とにて、神にり造られたる新しき人をるべきことなり。」（エペソ4･22～24）

エペソ書5･19～20、6･1、アーメン。6･14～18、信仰の勇者の。6･23～24、アーメン。とうとき主イエス・キリストの御名により。

聖日の午前を独りで。然れども僕（辰雄）一人ではない。見えざる多くの聖徒（天にも地にも）と共に。誠に賑やかにして、聖にして、荘厳の気にみちていた。共に歌うとき、共に祈るとき。

今日ほどこのことを強く感じたのは、水戸に来て初めて（ではないだろうが）と云ってよい位である。「聖日をおぼえて潔く守るべし」、アーメン。

僕は一般にただ机に向かって勉強をこつこつする人と思われているが、僕の祈る人、沈思する人たる一面を知らない人は、実は僕を一番（最も）知らない人である。僕は（今日の）勉強することが義務であり、働くことであるから、これをなさざるは罪であるから、勿論する。それを何とか云うのは云う人が浅はかである。かく今、確信を以て強き言を吐き得るは、信仰によってである。旧き辰雄をぬぎすてたる新しき生命の辰雄であるから、いかに以前の僕と今の僕とが異なるとも、そんなことはらぬ。召されたこと、選ばれたことは即ち、これによってあきらかである。

聖書の言に矛盾ありと云いて、聖書は信ずべからざるものと云うは、聖書を読むことを知らざるもの、即ち之はまた真理を解せざるものである。僕もはじめ読みい箇所があったが、それが言葉の上でいかに矛盾していても、前後とその事情によって決してしからざるを知る。否、かえってそれによって真理の真理たるを明らかにされるのである。

エペソ書を読んでサイドラインを青線で付けた。そしてそれを独乙語聖書（ルッター訳）と比較、彼が肉太文字で書いた聖句が一つももれることなく、僕のサイドラインと符合しているのを見て、僕はたらざるを得なかった。即ち、それは信仰をさんために非ず、ルッターにしたがいてアーメンと云い得たこと、そして僕も聖書の強き箇所々々の幾分なりとも読めて来たことである。

僕は一体、ラインを引きたがるくせがある。多く引きたがるから今日はなるべく少なく引いた。それでもルッターの二倍は引いてしまったが、これは已むを得ない。一体、善なることに然り！と云うことのスキな男である。悪なることにもっと強く否！と云える男になりたくある。僕の交わる人が主として長上のものなる故に、そう一から十まで所信を貫いて反対するわけにも行かぬ。実際問題はむずかしい。まず差し支えなくして、そして、それを否と答えるときに彼等の感情を害したり、面白くない結末を来す様なときは、已むを得ずしたがう。しかし、かかるさまたげなきとき、または断然、信仰上否！と云いて、我が主張を明らかにすべきときは否！と云わねばならぬ。何となれば、神のよしとしたまわぬことであるからである。神の怒り給うことをなしてはならぬ。それは明らかに背神である。神のたらんとする僕の到底忍ぶあたわざることである。

〔註：独文省略。ダンテの『神曲』地獄篇第１５歌５５～９９行の抜粋の引用あり。

ここでダンテは、旧師ブルネット・ラティーノに会う。ブルネットはダンテが、フィレンツェの市民たちからひどい扱いをうけるだろうと預言する。ブルネットはダンテに向かい、

「君の星の導くままに進めば、君は必ずや栄光の港に入ろう、あの麗しい世でのわしの判断に誤りなくば。またわしが、ああも早く死んでさえいなくば、天の加護の君にこうまで厚いのを見て、わしは君をはずまし、にはかゆかせただろう……」。

ダンテはブルネットに答えた、

「わが祈るところ悉くききいれられていたならば、あなたはまだ人間のから逐われずにすんだものを。そは、在世のみぎり、寸陰をおしみ、人の不朽に生くる道を教えられた頃の、あの慈父のように慕わしくなつかしいあなたの面影が、私の記憶に定着し、今は私の胸かきむしるからです。あなたの教えをいかに深く肝に銘じているかを、当然のことながら、のある限り、私の舌は語りやまないでしょう。……私があなたに知っていただきたいのは、良心、私を責めないかぎり、私の命運の欲するままを甘受するということ。……」（寿岳文章訳）〕

このダンテとブルネットの対話は何を僕に語ってくれるか！　僕はインスピレーションにうたれた。然り、政美兄上と僕との今日の対話である。然らば僕はダンテにまで。僕のあまりに不遜なるをあやしむ。しかし、ブルネット対ダンテは、政美対辰雄の大なる大なる姿である。即ち後者は前者の小なる小なる姿である。この美わしき道を僕は歩まずにはいられぬ。これによりて（神曲）また思うことは、ダンテtoブルネットは政美to辰雄。政美to辰雄はこれほど神聖であった。

１９２５年１１月２日（月）

昨日は聖日のことなれば、９時のお祈りがすむと間もなく就床した。

誠に不思議なる夢を見た。それは海岸である。多くの友が一緒に居た。波が荒くて泳ぐにも泳げない。やがて静まった。ある友が言った、「入ろう」と。そこで僕はとびこんだ。ところが外の友は皆どうしたのか入らない。とまもなく、大風が吹いて来て大波となった。僕は岸へ泳ぎつかんと急ぎ泳いだが、到底着かるべくもない。そこで僕は感じた、然り、もはや我が力は及ばず。神にまかせまつると。波は益々荒くなるばかり。岸の方には多くの友が僕を見ている。僕は叫んだ、

「皆さん、さよなら！　僕は遠くの国へ行きます」

と。かく２、３回くりかえしたことを憶えている。

「主よ、みこころのままに」

と祈りつつ僕はただ波にまかせて浮いているだけであった。岸は遠くなる。人は小さくなる。「入ろう」と云って入らなかった友のことも何にもかも僕のうちにはのこっていなかった。僕は大海にもまれながら、ただ

「主よ、みこころなさせ給え」

であった。と、ややありて、驚くべし。実に実に大きな波が一つのウネリをなして神からやって来た。僕は、「主よ！」と祈って、その波を見つめていた。その波はやがて来って僕を乗せた。僕は波に打ちくだかれるかと思った。しかれども、「主よ！」であった。波は見る見る僕を岸の方へ運び行き、岸は眼前に迫り、しかしてそのすごきくだけと共に僕は打ちくだかれるでなしに、何の痛みもなくうちあげられた。そこに一つの木があったので、僕は速やかに木にしがみついた。すると波はものすごく引き去った。見れば続いてがおしよせてくる。僕はこれに呑まれては大変と急いで陸へ上った。かくて僕は疲れ果てた様子で立って、おそろしき海をながめた。その中に海はおだやかになった。すると今まで居なかった友達が泳いでいるのが見えた。僕はあまりのことに足も運び得なかった。と、眼がさめた。

以上の夢は何を暗示しているのだろう。僕にはわからないが、今の僕を考えるとたしかに、あることを暗示している。そしてその大体を知ることが出来る。それはもう１、２週間のが明らかに知らせてくれるのである。

兄上、高木八尺様から御手紙が来ていた。高木様は信仰の勇者である。僕は彼の如き人にならねばならぬ。そして誠にジェントルマンである。謙遜であり、奥底に深きおちつきがある。グンデルト先生によろしく、と云うことであった。

１９２５年１１月３日（火）

晴。払暁、２回に亘りて膀胱とおぼしき辺に痛みあり。共に２０分位なりき。已むを得ず登校できず。友より借りし本とノートをかえし得ず、しかも今日必要のものにて悪きことをせりと思いき。昼食後、例の松濤君来てくれ、これを友に渡すことをたのめり。友情厚き彼にかく見舞われること幾度なるかを知らず。感謝す。

「ルッター」と「体験宗教の研究」と「ダンテ」と、それから今日はブイライアントの誕生日であるので、彼の詩を４、５音読して一日を暮らした。彼の詩は「平民詩人」（内村、畔上先生）によって知ったのである。書くべきことあり、なすべきこと更にあり、筆をとむ。グンデルト先生に教わっているゲーテの『ファウスト』の「天上の序曲」のder Herr〔主〕の役を演ずべく、昨日指名されて来週の月曜やることになっている。来週の月曜は出てやりたいものである。

「人としてのダンテ」は、強き感動を与えた。読んでいると僕の全霊全身が躍如として来て、僕も高き野心にもえたった。実際、僕も偉大なる人物の中に入りたい。それは名誉のためでない。それは偉大な人物を要求している日本に、神様にとらえられた少数の人々の中の一人として僕も国のために尽くしたいのである。勿論、国のためとは国民、人心のためである。人々の霊統の亡び行くのを見かねて真の愛国心は起きてくるのである。

僕はあまり夢見るか、自己の分にすぎた願い、空想ではなかろうか。かく思うとき実に涙にくれたくなる。しかし、これはともかく、なる霊魂の一つとして神に全身を捧げまつらんのみ！　アーメン。

ルッターの、

「われ理想を有するに非ず、理想我を有す」

に倣って、

「我、神をとられたるに非ず、神我をとらえ給えり」

である。ダンテに倣って、

「それは小さい霊である、直ちに過ぎ去るであろう」

とは僕の今の心の（ある者に対する）不満に対して云う。Hegel〔ヘーゲル〕は言った。

“Nichts Großes in der Welt ist ohne Leidenschaft vollbracht worden.”

〔情熱がなければ、世界で素晴らしいことは何も成し遂げられませんでした〕

と。政美兄上のはダンテのそれと似通うところあるを感ずる。ダンテの胸中は常に一種のがあった。真の詩人、預言者にかかる不満のあるは実に已むを得ない、否、正当である。何でこの世の人心に対するがなくて居られようか。僕の如き小さなものにも義憤は常にある。これが濃厚なるときに僕の周囲の人にさえあらわれて、彼等の感情を屡々害しそうになって、ハッと思って顔色をやわらげることさえ経験した。

僕はこれらの書と親しみ、現在の世を凝視するときにダンテの如き深刻なる面持にならざるを得ない。カーライルが

「世界の凡ての時代に於けるこのダンテを望める真実な霊魂は、彼のうちに兄弟を見出すであろう。彼の思想、彼の不幸と希望、深い真摯は、同じく真実なる霊魂の真摯に対して語るであろう。彼等はこのダンテが兄弟であることを感ずるであろう」

と云ったのは実に僕の如きものをしても然り！と云わしめる。ダンテの智は僕には天上の星を仰ぐ如く遠くあるが、彼の熱情の火の一炎はこれまた僕のものであると云うことが出来る。

中山昌樹氏の深き研究に敬服した。学者になるならここまで行きたいと確く思った。クリスチャンはLebendig〔生き生きとしている〕である。不滅の火に燃えている心を有するものである。書くをやむと云いて、また書いてしまった。もうやめる。まだあるが。

演習中の兄上から手紙を戴く。四郎ちゃんからも来る。武田の叔母様、フルンケル〔、おでき〕だそうである。フルンケルと云う名は電光的に僕の頭には政美兄上を思い起こさしめる。即ち兄上は大学在学中、いつだったかばかに顔にフルンケルが出来たことがあった。眼のふちに出来たときは見えなくなる位で僕さえ心配したことがあった。

今日は明示天皇祭である。例年の如く晴天である。いかなる天の心であるか、幸なる日である。

１９２５年１１月４日（水）

晴。休校（僕が）。様々なことを思った。大学志望の件も一問題、僕の身体も一問題。卒業の能、不能さえ一問題。しかしれも、やがてすぎ行く小さな雲である。すぐれ渡ってしまう。大きな空である。何よりの問題は、我が魂は如何である。ここに至って聖書にすがらざるを得なくなる。ダンテもミルトンもルッターも暉く星であるが、最大なものではない。最大なるもの、最高のもの、聖なるものは「聖書」である。毎日は聖書によりて光明である。マタイ伝だけでもよく読んで見る。もうそこにくみつくせない限りなき生命の泉が湧いている。なんと有難いことではないか。

「思い煩うことなかれ、一日の労苦は一日で足れり」

である。主なるイエス・キリスト在まし給うよりほかに何の力が僕にあるか。主よ、祈らしめ給え。（私は筆をおきます）

今日、母上、武田の叔母上におたよりを書く。

１９２５年１１月５日（木）

晴。今日も休み。今日は実弾射撃の日である。今日は尿（第２回目）の出るとき、その最中に於て何物が出た様な気がした。スピッツグラスにしなかったのはわるかった。ひょっとしたら石かも知れぬ。神よ出し給いたるか、と思って感謝であった。まだあるかないか知らないが、問題でない。問題はただである。「信仰」これのみ。信仰ありて万事はしである。

今日はとにかく（随分わからないところもあったが感謝と力とに溢れて、何ものかルッターに教えられたるを確信して）、Proff. Karl Holl : “Luther”〔カール・ホル教授の「ルッター」〕の１．“Was verstand Luther unter Religion?”〔ルッターは宗教を何と理解したか〕を読み終えた。１１０頁。僕にしては大出来であった。３８日間で。

僕はSorgen〔心配〕しない。これほど愚なことはない。SorgenのおこるときはGlauben〔信仰〕の弱くなっているときである。本当に思った、Glaubenに生きんことを。ヒルティーは実際いいことを云っている。『眠られぬ夜のために』の各頁が実に生泉の流出口である。大学のこと問題であろう。しかしよい。僕は毎日をしっかり神様にすがりつつ勇ましく歩むのみである。クロムエルの確信である。

１９２５年１１月６日（金）

晴。この頃よく晴れて有難い。昼間全力を尽くして勉強した。夜になると頭がくたびれて出来ない。これが本当に健康によいと思った。

Erst die Arbeit, denn das Spiel.〔最初は仕事、次に遊び〕

である。原始の人間が健康であったのもよくわかる。日の出と共に起きて働き、日没後まもなく寝る。それが自然である。文明は自然に反対して無理をして行く。人間は即ち無理へ無理へとその道を辿っている。これ滅亡の道である。神から離れて罪へ。信仰に立つ人は神へ。故に亡びざるの道は信仰を措いて他にない。

夜、三弦さんと久しぶりで話す。また沈黙をまもらねばなるまい。明日は、ああ、言うまい。神よ、この日を感謝し奉る。今日、富山茂君に手紙を書く。彼の信仰の益々強くならんことを。

１９２５年１１月７日（土）

晴。学校へ行く。４時間目は皆ニゲル。何の故かわからない。経済、経済と云いて、本まで選んで先生に願って置きながら、何故習おうとしないのであるか。その不徹底、不熱心がきらいである。理由はこれほど強くはないのだろうが、とにかくもっと真剣でありたいものである。

１９２５年１１月８日（日）

Sabbat〔安息日〕、 J.Milton to Heaven.『失楽園』をドイツ語で読む。また詩を読む。Nr.2191～2192, John Milton: Das verlorene Paradies (deutsch von Adolf Böttger)〔ジョン・ミルトン、失楽園（アドルフ・ボットガのドイツ語訳）〕は昨日買って来た。それから昨日はまた、Immanuel Kant: “Von der Macht des Gemüts”〔イマヌエル・カントの「情の力について」〕も買った。今日はまた詩を読んだり、ローマ書８章を読んだりした。しずかな聖日である。昨日は千鶴代さん分娩された。男の子。安産、お目出度し。

心臓が幾分弱っている様に思う。無理はしまい。２学期はうんとわるい成績でもよい。音信を２、３本する。

いたくなやんだ、祈った。人類のために。どうして人類はかく亡びへと道を辿っているのだろう。人類は滅ぶことを痛く感ずる。ユダヤの預言者が熱烈に神と交わり、祈り、預言したことはその預言以上に聴かれた。キリスト来り給いて信ずるものは救われた。人類に救の道があり、すでに救われてあるにらずこれを受けんとしない人類の罪は、アダムとイブが禁断の果実を食った以上に大なる滅びの罪である。パラダイスは再び得られたるにこれをけんとしないものはもう救うに余地がない。まして強く反対する不信の者に於てをや。

キリスト、マーラナサ〔主よ来り給え、再臨〕の日にすべてよく審判される。ただ我等は信仰するのみである。彼等のいかにさばかるるは知らず。信ずるものは救われ永遠の世継ぎである。科学は進歩するだろう。しかしそれは滅亡の道である。

霊霊は信仰より永生に昇り、キリストのマーラナサに至りて完全に達し、神の聖旨は成る。アーメン。

物霊は物眼より懐疑に迷い、滅亡、無機無生命に堕す。これ人にあらず、神を離れたり。

１９２５年１１月９日（月）

晴。母の誕生日第５７回。起床７時。登校。第２時間目に至りてなおパルスが１分に１２０余であり、ノートがとれなくなったので、実に残念だったが、第４時間目の『ファウスト』の「天上の序曲」の「主」の暗誦をすべき役を果たさずして帰った。詩人ゲーテ、しかもファウスト、しかも天の序曲の「主」der Herrを僕は教壇に立ってなすべく命ぜられていたのであった。それのかかる次第でなしかねたことは実に残念であった。しかしその光栄と「もし万一」とを慮って僕は後者をとって大計をなした。

松濤君の自転車をかりてゆっくり乗って帰った。すぐ休んだ。脈は動くとすぐ上昇し、静かにしているとおさまっていた。

母上の誕生日、午後１０時を報ずると共に、讃美歌５３「神は愛なり」を誦い、お祈りをした。これは母上様とのお約束であった。第２学期内に僕は云われざる心の平安に達した。それは何となく「死」が近い様に思われて、それと共に主への感謝、希望と赦免とが頭にのぼったのである。

１９２５年１１月１０日（火）

晴。今日はルッターとシラーの誕生日。彼等の画を机上に据えて祝った。今の盛りの菊花も実に美わしく咲いていてくれた。佐藤繁彦先生、グンデルト先生に御手紙を書く。一日、ルッターについて読んだ。午前はしかし、常磐病院で費やした様なものであった。ノイラステニー〔神経衰弱症〕に少しかかっているとのこと。僕はノイラステニーかも知れぬ。しかし、ゼーレ〔魂〕は最も強くある。安心である。Ｘレイ〔レントゲン検査〕にかかった。生まれて初めて。また胸部をフォトグラフィーレン〔撮影〕した。心臓もやや弱いのでその投薬を飲まねばならなかった。しかしこれはすべてやめることだろう。１００位をすぐ打つのは、どうしてもまだ神経が弱っているからだそうである。

さて大船にある僕は、すべてこれらを意とせず大きな気持で全治を待とう。あせってはならぬ。

渡辺のおば様が来られた。千鶴代様のお産後のために。お土産もあり、いただく。松濤、誠実の友がよく見舞いに自転車で来てくれる。彼との話は多く霊魂に関すること。人の心に関わることである。それと本のことである。見舞と云うよりむしろ互いに励まし遭う様なものである。使命は我等の双肩にある。

１９２５年１１月１１日（水）

雨。神経衰弱、それはたしかにそうらしくある。僕はどちらかと云うと多感なる情の方であるから。宗教的、哲学的、思索に耽ったり、或は妄想ではなくとも、いろいろ瞑想に耽り勝ちである。よく夢を見る。過度の読書と思索の連続で神経を弱らした傾向である。しかし、真の所謂神経衰弱ではない。これは信仰によって（直ちにではなくとも）必ず直る。心配はない。

今に読書、勉強をさしひかえねばならなくなると誠につらくあるから、徐々にひかえてゆっくりやることにする。大学なんか来年でなくてもよい。希望は大である。ゆっくりやるべきであると思う。大学へ入る前にもっと僕は真の準備に忠実であらねばならぬ。まだ読むべき本が読まれていない。……〔独文省略〕……。

１９２５年１１月１２日（木）

晴。『聖書の研究』１１月号を２、３日前から待っている。今日こそは来た。郵便！の声にハッととびたつ。ドサッとおかれる。それはこの本の音である。ルカ伝を読み、と共に今日はこの書を読んだ。主キリストの、ルッターの俤、内村先生の俤の躍如たるものせまり来り、強きもの、深淵なものがのぞんだ。主言い給う、

「今は若し、しばしまて！」

と。アーメンと涙をながす。畔上先生の回想の秋。僕も自分の１９２２年の秋、新生の夜明けのせまれるを何となく感じたる秋を思い出さざるを得ない。

内村先生の「日々の生涯」の中に、帝大生１４５名、主に理科であるとのこと。自分の大嫌いな文科と法科とは今は一人も居ないらしい、とある。針にさされた様に感じた。しかしその次の瞬間に思った。「然り！　僕は先生のお嫌いな文科に行こうと思っている」。しかしこのむべき文科（それは実際そうである。先生の御心の何れにあるか、何をさして云われていることかよく僕にわかっている）、その文科に僕は敢行する。先生は文科なるが故に一も二もなく嫌われる方ではない。いやなものの中にもに美わしきもののあるのを知って戴きたい。否、御存じである。僕はゲーテに心酔できぬ。僕はドイツ語を知りてドイツの文学中の少数の深きもの、及びその哲学、ことにルッターに関して研究したい。佐藤先生の片腕になれれば実にありがたくある。要するに僕の将来は漠然たるものであるが、福音のため己のは全然意になし。財産地位、意になし。最も敬愛する恩師内村先生に嫌われてもかまわない。僕は先生の心を知る。先生の誤解はこれ苦杯である。一般の文学士の罪を負ってそのはじを敢えて負う。真の文学士の現わるるを先生、見られよ。真理のために闘う文学士と云う真の文学者である。しからざるは文にして文にあらず。

第２学期はした。卒業可否、問題ならず。我は病床に義務を守る。

神よ、助け給え。我起たざるを得ず。アーメン。

汝、黙せよ、深くあれ、じっくりと考えよ、じっくりと読めよ、すべての舵はこれなり。

日本の思想界、宗教界、教育界、すべてだめ。迷いそれ自身、それ自身が日本である。日本の博士、学士、……それらの肩書とは何であるか。武士道を忘れ、西欧物質文明のみをとりたる日本、これほど危ないものはない。汝の失敗すべてよし。ただじっくりと。彼等の言葉はすべて意とするにたらず。聴け、聖書に。すべての善、真はここにあり。導かれよ、聖霊に。すべての道はここに正し。教えをうけよ、内村先生、藤井先生、畔上先生、佐藤先生、塚本先生に。ヒルティー先生、ケーベル先生に。その外はいらぬ。くあさることなかれ。第一等の書に学べ、深くあれ。

１９２５年１１月１３日（金）

雨。あわれなる辰雄よ。父なる神様にゆだねて、思い煩うこと勿れ。

「汝の道は最善の道、もし汝が父に信頼し奉らば」

このことを確信して歩めよ。汝は汝の義務をなして進め。すべてのおそろしく見ゆることは消えうせん。聖霊は汝をどこまでも正しく導き給うらん。然り、汝の兄はかく信仰に歩みて召されき。汝、政美兄上の弟もまた然らずして居られようか。

彼の召されしことのかくも早かりしことを解するに苦しむ。しかれども、そは汝の為とうかがいて、涙を以て真剣にしたがわざるを得るか。母上、失明し給いたるは之また汝の為とうかがいて、孝を尽くさざるを得るか。父たる神、何で汝に健康にて働き得る体を与わざらんや。之すべて汝一身のためならず、すべて神の御栄のあらわれんためなり。

神のために、貴き主のために、私はどうなってもよい身体でございます。聖旨ならんために私はいかに苦しむともよいのでございます。願うところは、私は私を忘れて、信仰の道にどこまでもこの福音のために使われんことでございます。主よ、願わくは、きこしめし給え。アーメン

病院に行く。結局、どの程度までどうなのかわからない。とにかく歩いたり動いたりすると脈拍は１００位にすぐなる。しずかにあまり考えないでいれば８０～７０位である。神経衰弱であることはたしかだが、自分のは本当ではない。これはしかし僕の罪である。即ち命ぜられた以上に不自然な勉強をしたからであろう。僕の体力はそんな無理は出来ぬ、と云うよりも無理も度をすごしたからであるらしい。ヒルティーを読んでいながら、かくなったと云うことは実際ヒルティー先生に申し訳もないことである。『眠られぬ夜のために』は本当に実行されなければならぬ。しかし、確信がある故にすべてよしである。

つまらぬ後悔があってはならぬ。とにかくこれからあまり読書をしてはならぬ。ことに睡眠時間は８～９時間とする。なおさなくてはいけない。それは方法によってでない。毎日の心によってである。

汝のを鮮明にせよ。これ実に大切なことである。僕はどこまでもルッターの基督教である。それよりもさきにパウロの基督教である。使徒的単純な基督教である。今の日本にて内村先生、藤井先生等の基督教である。そは真似によってでない。心酔によってでない。僕の内なる心と声とが全くこれに合致するによってである。所謂旧教にあらず、所謂新教にあらず。教会とか、……団、協会、組合と云った様な団体的組織は毫も僕の信仰を益しない。害である。こんなものは無関心である。彼等は勝手に合わんと欲し、勢力を作らんと欲し、人を入れて救わんと欲し、……即ち、くわだてるこの企てがすでにあやまりである。

生ける主、イエス・キリスト、贖主、救主いまし給いて、我、聖霊によりてこれを知り、この中にのみ歩む。これが主の恐らく喜び給う道であると思う。それは僕の信仰、主の与え給う、直接に与え給う信仰が明らかに然り！と云う。

これにまさる証拠はない。むしろ聖書はこのことのためにあかしさえしてくれるのである。聖書は教え、しかして助けて、保証し、益々かたくしてくれる。かかる故に、ヒルティー先生、ケーベル先生は実によき師にして友である。我が武士道と独乙精神。ケーベル先生を読んで感じた。これについて僕は興味を有す。

我々、総て人の霊は神を呼ぶ。主キリストによって救われた。このことと我が国体とは全く別である。皇室を尊ばないものは日本人たるを得ないはずである。忠君愛国はどこまでも日本人のモットーであらねばならぬ。昔と今と忠君愛国に変わりはない。しかしこの語はその深き意義に於て殆ど全く知られていない。忠君の何たるか、愛国の何たるかを真に解するものは実に少ないのである。武士道、それは不完全なものであるが、今の諸思想よりはるかに健全なものである。日本の武士道にキリスト教の精神を植えたならば、実に日本はゆるぎなき国となれる──この間のことは内村先生が言われることであるが──僕も実際漠然ながら（しかし明らかな確信を以て）このことを洞察する。キリスト教は真の根本に於て世界の各国に最も適せるものである。これは宗派を以て解せられてはもうダメである。キリスト教は本当はキリスト彼自身である。力である、生命である。生命は、力は、この世の他の媒介、助力の一切を要せず、各人、個々に直接にのぞむべきもの。かくして初めて真なるものである。

そこに、小さきあやまりは生ずるとも、根本は皆、等しからざるを得なくなるのである。かくして強き団結は形をとらずして成って居るのである。形をとらんと企つること、それはあやまりである。人が人の心から──そこに無理が生じ、あやまりが生ずる。神はすべてこれをきらい給う。滅びへとおとし給う。神の意志は神によってなるのであって、人の何ものをもかりる必要なきものである。

これらのことは全然、神より賜いたる直接の信仰より生ず（発せられるなり）。このことは信仰の何たるかを解せる人、即ち、信仰を有する人（と云ってもよいだろう）にあらざればわからない。人の有し得る最大の知識である。力である。生泉である。僕は若年ながら信仰の故にあえて言う。信仰は年の問題でない。

神よ、願わくはかかる言の神の前に不遜なるを知ります故にゆるし給いてよ。僕は己れの分を尽くして歩めばよいものであります。その歩みの形式はいかなるものにもせよ、すべて生きたる福音の生きたるあかしとして一生を神の御前に捧げしめ給え。僕に何のいも要らないのでございます。僕が神のたること、そのことが僕の全部であります。その外に何の飾物も要らないのでございます。

主、の日に「よし」と言い給わばこれ最大の名誉にして、これは若し僕が僕自身を認めてよいならば、最大の感謝を以て僕を呼ぶ唯一の飾物、否、実なるものであります。そのときに主の僕、神の子たるの光栄にあずかれるのでございます。ああ、この願い、この願い、この願いをきき給え。願わくはきき給え。ああ、しかしこれは今、僕が思ってはいけないことであります。僕は地上にてこれを思うことをゆるされません。それよりさきに、主の僕たることが地上に最大のことであります。願わくは、主の忠僕たらんことのために。外は一切、僕の考えにありません。願わくは、忠僕たらしめ給え。アーメン。──病床にて、１０月８日より１ヶ月あまり。

１９１９年１１月１３日は、兄上にとって、高島様にとって聖なる聖なる日であったことを知る。天の兄、地のかよ子様に祝福あらんことを。高島おば様と天の兄と天にて安からんことを。アーメン。

１９２５年１１月１４日（土）

快晴。秋の霽れ渡りたる朝、その輝く、光る露、たちのぼる陽炎。静かなる幸なる朝。第一はピリピ書を通読。実にこれほど感極まってピリピ書を読んだことはまれである。即ち、今までの読み方の真剣でなかったことを知る。パウロの祈祷、熱祷たる信仰に浴して力づけられた。ピリピ1･20～21､23。2･3～15。3･7～14､19～21。4･1､4､6､7､11､13､20､23。

「6何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。 7さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」（ピリピ4･6～7） 〔独文〕

実に静かな日である。暖かな日の愛を感ずる日である。木も草も生気のあるものはすべて僕と共に神を讃美している。

実際、今日は思った。日本人の多くは駄目だと。また今の世界の人は多くだめだと。世界のことはともかく、今の日本人は駄目だと思った。禍なる哉、孔子の道徳！　ああこれはあまりにも強すぎる言ではないか！　孔子はその深きところに何があったかは知らない。もし彼にして深きものありしならば、何故にその根本なる深きものを強く強く言ってくれなかったか。その外形的な道徳は日本を禍した。日本人を浅薄ならしめた。もとより孔子、彼を責めんとしない。孔子は日本に来て宣伝したのではない。彼の外形的道徳を容れたる日本人を責む。その不徹底！不真面目！とさえ僕の内なる深きものはす。かかるが故に日本人の多くは「一時的ごまかし」で出来ている。外面平和である。しかし、その家庭に真の平和、和気、強きもの、聖なるものに至ってはどこにあるか。彼等は人間的のものを外面に飾りたてる動物である。真の人間はどこにも見えないと云ってよい位に感ずる。神的要素がどこにある。神は創世に塵より人を造り生気を賜いたのではないか。かかる人間たるものが神を慕うことを忘れ、の忠実なる僕たることを忘れて人間たり得るのであるか。

僕の感想はそれからそれへと移って行って書くを続けたら限りなきをおぼえる。しかしてそれは結局同じことを言うことになる。は常に一つである。

今日はケーベル先生を読んで深く先生を敬慕すると共に、先生に従って然り！然り！と云った。ヒルティー先生、ケーベル先生は僕にとって外人のただ二人の先生にして毎日の友である。しかも共に独乙人である。偉なる哉、独乙人。ルッターの国とどうしても云わざるを得ない。また思った。ケーベル先生に習った人は一面に於て真のクリスチャンにならなければ居られないはずである。そして、そのことがわからなければ、彼は本当にケーベル先生から何を習ったかをつかみ得なかった人であると。

僕は読んで知る人間よりも、考えや信仰によって知る人間であるらしい。そしてこれらの確信が時には予言とまで言いたきことが屡々適中した経験を有つ。また非常な奇蹟的な事実の２、３を──それは小さいことではあっても──深き真理を含む事実を経験した。

神様は人に読めと云われるよりも、行え、祈れ、信ぜよと言われる方である。僕はこの頃、しかし、著しく読書の人になった──それは僕のに比べて──毎日々々ブランとしていること、時間を浪費することの罪悪であると云う感と、それが僕にたえられぬことである感じとが強くなって来た。もしかねない傾向であるから、すこし注意を要する。それは第一に聖書からまれる故に、僕の舵はたしかである。安心してよい。聖書が心から僕の読まずには居られなくなったことは何といっても感謝の最大なものである。

かつてかかるとき──１９２３年──があった。しかしそれはまだまだであった。そして今と云えどもまだまだであることはよく知っている。希望より希望へである。信仰より信仰へである。１９２３年の春に芽生え出でたる新しき生命は年と共に神のためにのみ栄え行くことをゆるされている。感謝なる哉。主よ、願わくは、永く永くいつまでも父なる神の栄光のため、また栄光によりこの永生にあずかることを得しめ給え。アーメン。

歓楽を求める人と、神との交わりを求める人と、一致し得ざるは当然のこと。しかも実際問題にありて彼等と断交することの出来ないこと、そこにも一つのクリスチャンの苦杯がある。おつきあいで──それが目上の人なる故に──しなければならないことは実につらい。これ本当は神の喜び給わざることなるも、しかも避け得ないときに、僕は涙を以てこれをなし、神にお赦しを乞わねばならぬ。神様はゆるしてくださる。それ僕をしばたるこの世の権なるが故にである。今は暗黒の権威の時、されど光はこれを滅ぼすべく待っている。

今晩の如き星月夜を仰がざるは実に人としてなさけないものである。彼等は正しく動物である。今日はフォーマルハウト〔みなみのうお座〕を明らかに見た。、もう一つは木星だろう。西の空の偉観であった。〔夜空の星のスケッチあり〕

『ルッター研究』１１月号が来る。ルッターの横顔が表紙に描かれている。「宗教改革記念号」である。４６条まで書かれてあった。これを読んだのは初めてである。いかにルッターが運動的でなく、あくまでも霊魂のことに真剣であったかがわかる。これをラテン語で読めるときがまたれる。

大学は希望のところである。多忙のところである。僕には大学に入る前にもう１年を必要とするか、或は大学に入りて４年なることを必要とするか、いずれにしろあと３年では苦しすぎる。

東大独文科生藤田君が「ルッター研究」訳されている。僕のよき先輩ならんと推測される。う、彼のよき指導者ならんことを。それ以上によき友たらんことを。やがて僕は佐藤先生の片腕になって働きたい。内村先生の会員になりたい。藤井先生の忠実なる僕になりたい。日曜の午前は先生の許にすごしたい。先生のお手助けになりたい。先生は眼がおわるいから、校正などはやりたい。また佐藤先生の御事業「ルッター研究」のためにも。

ああ、あまり僕は忙しすぎる様である。しかしそうでもないだろう。こんなよろこばしきことはない。これが出来ればもう実にうれしい。僕に与えられる神の特別な恩寵であるにちがいない。兄上が僕にこの道をえらんで下さった。また実に兄上に対してもお答え出来るうれしいことである。僕は身体を大切にすべきである。勉強すべきである。僕は一切のことを忘れ、己れを忘れて神のことのために使われたいばかりである。この世にもこんないい事がある。

この三人の先生に仕えることは、かの「二主につかうるあたわず」とのお言葉にそむくものであるか。僕はそうでないと思う。内村先生は藤井先生、佐藤先生の恩師でもある。僕達の大先生である。しかしこれは事実である。そしてこの三人の先生達は皆しく福音の信仰によりてキリスト我等の主の僕で居られる。この意味に於て一つである。ことにその信仰は全然同じであるから一つである。先生方のお手伝の少しずつをしたってそれが二君につかえる二心のものであるとは思われない。

僕は同じ心を以て、真に心からこれらの先生にもおつかえ出来ると思う。キリストは葡萄の樹であって、我等は先生と共にその枝である。僕が会員になりたいと云うのは勿論その名のためではない。もし内村先生の会員が一般の会員と同性質なことがあろうものなら、会員たるの資格はない。会員の意義を失う。

去年のクリスマスに列席させていただいたあの時の御恩は忘れられない。僕は会員でなかった。しかし唯一人の僕をゆるしてくださった。僕はこれらのことを思うとき、かえすがえすも僕の勉強の足りなかったことを残念に思う。しかし仕方がない。これが僕の道であったのである。Es ist genug. Gott sei dank! Amen!〔それで充分である。神に感謝！　アーメン！〕である。僕は前進！前進！である。希望！希望！である。僕はなんでもよい。神の栄光、世々に限りなくあらんことを。アーメン。

夜、「花」をやりに友達が三人、三弦さんのところへ来た。僕をお座敷から追い出される。それは当然のことであろう。１０時頃帰った。僕はその間、ルッターについて学んだ。コロサイ書を読んでしまった。Geistig〔霊的に〕に豊かなときをもった。彼等はGeistigに失ったときを有っていた。

１９２５年１１月１５日（日）

晴。聖日の午前を８時から１２時まで、聖書と讃美歌と「ルッター」とヒルティーとですごす。兄政美、「我が友の友」は僕と共に居た。勿論、僕達はキリストの十字架の許に居て送った。４時間は実に恩寵に溢れていた。

外では風が吹いて居た。この世の人のなさけない声も聞こえた。「オハチイレ」を売るものとお家の方との問答があった。それは金が大問題であったらしい。互いにうたがう人々よ、何故にかく疑いの世であるか、不信の世であるか、偽りの世であるか。神は今におそろしき焼き尽くす火と振るい落とす震とを加えられるだろう。僕達はおそろしくない。そのとき、主は必ず救い出して下さる。アーメン。

汝は来春、帝大独文科に入らざるべからず。これすべての自分のことのために非ず。全く汝の義務なればなり。汝、確信せよ。神様は信仰の存するところ必ず在まし給うことを。アーメン。〔註：この段落は青色鉛筆で書かれている〕

いよいよ僕には重大なときが来た。すべてのことに重大なときが来た。政美兄上を思い──今日とくに彼の日誌（１９１９年９月３日～１０月３１日）を読み深く深く思わせられた。と云うより全く今日は兄上から直接にうかがった。僕は兄上の心を心としてうかがい、全く一つになった。そうして来るべき多くの苦しみを明らかに示され、

「耐え忍びて汝の生命を全うせよ」

との御声をうかがった。これほど感じたことは未だかつてない。今日は殆ど声を出さんばかりに泣いた。お座敷に独りで午後の３時から夕飯まで静かに彼と語ったこの貴き３時間は実に神の御恩寵であった。神は兄上と僕のこの真剣な会話をよしと見給うた。二人はここにかたく祈った。厚く涙をながした。

母も兄も叔母も親戚のすべての人が僕のこの気持、苦しみを解して下さらない。ああ、僕は全く孤独である。僕の親友松濤も到底僕の心を解し得ない。クリスチャンならざる彼故無理もない。

この深き心を以てすれば、周囲の人々の声はすべて「空の空なる哉」である。ああ、うわべばかりの、あさはかな現代人よ。その言語よ、その行動よ、その交際ぶりよ、ああ虚なる哉、偽なる哉、不真面目なるかな、神をはなれたる哉。僕の心は最早彼等と何のかかわりあらんやである。

罪に泣く。秋はこのためであった。この病はこのところまで導くためであった。主なるキリスト・イエス様、深く深く感謝し奉ります。アーメン。

このことを知るものは、我が敬し愛し慕うである。天に在ます兄上よ、兄上は天、辰雄は地。天と地。肉体的には全く離されたる兄上と僕。ここに言い難き苦しみがある。それはただ死人に別れたという一般のものではない。呼び叫べども答えざる兄上よ、然れども近く近く共に在ます兄上よ。“Life is real, Life is earnest!”〔はなり、はなり！〕であります。

高等学校の３年！　ついに苦しみと奮闘への真剣なときが来た。これからである、本当に僕が大きい兄さんと一緒に苦しまねばならぬのは。兄上よ、どうか僕を導いて下さい。兄上の高等の終り、大学ことに１９１９年の歩みを見て、そしてまたその美わしき美わしき地上の最後を見て、僕はどうして大きい兄さんと一緒にならないで居られましょうか。聖国、光りかがやく讃美の里に待ち給う兄上よ、我もせまき門を入りてその道を歩まなければ兄上のところへ行けません。どうか歩まして下さい、しっかりと。

ああ、僕の生涯はこれ苦杯。主キリストの僕たらんとするものの実に有難き恩寵でございます。

父なる神様、義にして愛なる主なる神様、どうぞどうぞ、僕の旧き人を全く赦して下さい。どうぞどうぞ、に打ち砕いて下さい。「これに善なるも一つもあるなし、すべて罪のかたまり」。どうか、全くこの身をすてて主に従わしめ給え。どうか、十字架を負わしめ給え。真剣に真剣に神のためにのみこの身を終らしめ給え。主のため主のため、我はなし。アーメン。９時のお祈り静かに。アーメン。星づく夜！

１９２５年１１月１６日（月）

昨夜、武田の叔母様にお手紙をかく。僕の信仰、確信をついにせざるを得なかった。幾度か思いとどまったが、ついに出した。それは今日、松濤が見舞に来てくれて共に郵便局へ行ったときだった。「ルッター研究合本」の予約に応募した。

松濤は親切にも来てくれた。彼との話はまた霊魂のこと、それのみであった。彼は印度哲学をめんとしている。しかし彼の真面目をみとめる。彼に、内村先生の『聖書の研究』３０３の「神本意の宗教」を読ませた。彼は感じた如くであった。しかし、僕に云わせると、もう一歩である。彼がこのもう一歩、そしてこの一歩こそ彼を真に救う一歩なることを信じ、彼のために祈る。願わくは！　この一歩を本当に君のために祈る。君、この一歩は実に困難だぜ、君も僕が泣いた様に泣かなければこの一歩は踏みだせないのだ。涙の一歩である。

嘉代子様に出そうと思ったが、筆が動かなかった。この苦しみと歓びと、また苦しみとは信仰のある方でなければわからないであろう。

武田の叔母様は信仰は未だだろうと思う。であるから、かかる手紙は実に苦しくある。しかし信頼し得る唯一人の叔母様であるから、僕は敢えて書いた。

嘉代子様には夢の中でお会いした。信仰の話が出て話しているうちに、僕は学校が始まるから行かねばならぬと云ってお話を途中にして学校へ急いだので、夢は終った。もうすこし嘉代子様には沈黙を守ることにする。僕はこれから祈りで送る。それが最善の道である。主、共にませ。願わくは静かに導き給え。アーメン。

僕に内村先生は、再臨信者ですかとか、贖罪観はどうだとか、キリストをどう見ているとか云う質問に至っては全く驚かざるを得ない。かく問われる前に問うクリスチャンなる方におたずねする（勿論、実際は長上の人なる故にかくは云えなかったが）、

「再臨の希望がなくてよくあなたは基督者たり得ますね。贖罪をパウロと共に叫び得なくてよく基督者たり得ますね。キリストをどう見るかとは一体どういうお心からおたずねになるのですか」

と。若しかく僕が実際言ったとしたら、その方は、なまいきと言われるでしょう。然り、あなたにはなまいきでも、神に忠実であるが故に私は人の嫌悪批評は一向かまいません。これは疑いもなく、現代の基督者の一般を語るものである。

もうあれこれ書くのは無駄な話だ。やめる。僕達はあくまでも、「本当のクリスチャンたらんがために苦しむ」ばかりである。クリスチャンは常にクリスチャンたらんとするものである。それはクリスト教の根本である。

“Ich werde sein, daß ich sein werde!”

〔「私は在らんとするもので在らん！」〕

Amen! ついにパウロと共に、ルッターと共に、内村先生と共に、罪に泣くところまで。十字架を仰ぎるところまで。

勿論、今までにもかかることはあった。１９２３年「新生のとき」に、ことにあった。しかし雲は多くかかっていた。サタンの誘い迷わされたことは実に多くあった。然り、

「クリスチャンの生涯は常に悔改であること」

が今日、はっきりわかった。はっきりわかった！　これを離れてはならない。十字架を毎日々々仰がなくては居られなくなった。神様がこの病によって一段とあるところまで導いてくださったことを確実に感ずる。つかんだ、確実につかんだ。人の眼には矛盾、馬鹿げたことが、本当のクリスチャンには実に大なる大なる深き深き真理、恩寵なることがわかった、尚も尚も。主よ、アーメン。

かくてこそ聖書は第一の書、しかして、これのみなることがわかった。すべての宗教書もかくてこそ真に読まれることもわかった。体験がなくてはすべて虚なることもわかった。良心の苦しき叫びのなきところに真なるものの生まれないこともわかった。もう書かなくてもよい様にさえ思われる。書くべきことは多く多くある。そして僕は信仰の実がつよき信仰に必ずともなうこともわかった。願わくは、「主の十字架の外、我等になにもなき」ことを常にしらしめ、常にそのあかしたらしめ給え。アーメン。

短命。我が兄上の地上の生は実に短くあった。２７才を以て一期とした。そして永生に入ったのがその最後の５年間である。そしてそれは実に実に信仰に燃えていた。美わしく美わしくあった。ことに１９１９年、１９２０年、１９２１年！　地上の最後の３年であった。勿論その前の２年も著しくあった。僕にさえ、顕然とそれがわかった。高等学校をそろそろ終るころからであった。彼の眼は異なって来た。光と愛とに輝いて来た。１９１９年の８冊に至る彼の日記を読んで、どうして僕は泣かずにおれよう。主の愛にすがりて歩みし政美兄上と共にアーメンと言わずに居れよう。

短命であったが、これは真は永生であるのだ。兄上のために、惜しむものよ、惜しんでもよいが、それ以上に神の栄光を讃美せよ。かえって自分らの悔いとならぬ様、自分らのために泣かれよ。キリストの枝なる彼を見てさえ本当にキリストが、

「エルサレムの娘よ、我がために泣くな」

と言われたことがよくわかる。彼は立派にあかしをされた。ことに僕のために証をされた。僕のために、本当に。有難くて僕は何と云いようもない。僕もまた十字架の道を歩まんがために。然り、アーメン。

兄の召されたとき、僕は年末だ１８才であった。

「若きときにエホバを憶えよ」

と云う年にふさわしき頃であった。神の聖旨のいかにありがたくも苦しきことよ、深きことよ。兄、今在まさば、僕はどうなのであろう。あるいは信仰に居るかも知れない。それはかの病気があったとしてである。もし兄の死なく、あの病気、母の失明なかりせば、僕はどうであるか。それは実際わからない。しかし、今の苦しみと深きと、歓びの深きものはないにちがいない。いな、おそらく兄の死なかりせば、僕は信仰に於ていかにあるか実にうたがわしい。かく思うとき、かく思うとき、実にこの世に於ける最も苦しき苦しみの一つを僕は負わせられる。……。

「嘉代子様

　　　“Life is real, Life is earnest!”〔はなり、はなり！〕

この頃は政美兄なくして僕はないのでございます。数年前の兄の声は今日生きて聞こえるのでございます。彼はどうしてあんなにはやく召されてしまいましたか。どうして中学を卒業せんばかりの僕を残して行ってしまったのでございますか。なぜ僕を導いてくれなかったのでありますか。然し、然し、でございます。彼は僕のすべての苦しき訴えに対して無言の答「死」を以てしました。深き深き愛でありました。これは勿論彼の心でできたことではございませんでした。聖旨でございました。すべての疑問が「聖旨なるが故に」のもとに苦しくも涙ととけてゆくのでございます。「基督教とは遠い遠い国のこと、日本人には関係なし」位に思っていたものが、骨の骨、肉の肉まで食い入る様になるとは、どうしても思わるべきことでなかったのでございます。兄の短命（実は永生でございます）と僕の新生とに関係がないのでございましょうか。兄、今在まさば、僕は今、如何と思いますときに、ああ、僕は涙を以て……。

　この秋は特にこのためでございました。この春以来、健康で送って参りましたのが、先月８日の晩より病を得させられました。その腎臓結石と云う病はりましたが、未だ学校には出ることをゆるされません。水戸に於ける最後の秋、それへの希望は砕かれ、室内に多くの日を独りで送りました。しかしここに特別の御恩寵のあったことを感謝致します。聖書、聖書なる哉。かく呼ぶことを得しめ給いし恩恵のありがたかりしよ。ルッターはその大なる激励者でございました。そして近き親しき声は兄からでございました。どうして僕はこんなになまぬるいのでございましょう。大きい兄さん、ゆるして下さいと泣いたときに、兄も涙を流して祈ってくれました。その時、僕に握るべき手はございませんでしたが、彼の近く近く居ることを感じました。数年前の彼の心が今僕の心に全く映じたこと、之は何たる奇蹟ではございませんか。彼は生きている。彼は待っている！　それは父なる神様がますが故に明らかな明らかな事実であります。肉体はなくも彼は神によりて生きて居ります。彼の召されたのも僕の新生に甦ったのもすべて、彼、僕のためにあらず、神の聖旨のためでござましょう。「この世のまがさち、いかにもあれ、栄えのかむりは十字架」でございます。十字架の道、それは苦しくあります。しかしその中に深き深き願いと平安とのあることを教えられて、何と申してよいかわかりません。しかし避けたがる私を、どうぞ堅き信仰に歩ましめ給えと祈ります。ヘブル書１０章３５節～１１章１節までアーメンでございます。

　高校生活４年と病気の１年（皆合わせると４年の中１年病気にかかったことになります）あるときは明らかに罰でございました。「しかしすべてははたらきて益となす」でございました。かく神様に捉えられました上は、いかに小さきものでございましても聖旨ならんがために、神の忠実なる僕たらんがために、全霊全力を捧げ奉りて信仰の地上の生を終らないで居られましょうか。

　主よ、この世の何ものももはや僕の望のたり得ないのでございます。主の愛、真、善のならんがためにいかに小さくともこの身を使いたまえ。いまの世はいかに虚栄と偽善と貪婪に満ちて居るかを日々目撃しますときに私達は耐えられないのでございます。願わくは、彼等に誘われることなく信仰に堅く歩ましめ給え。私達は主の愛のあかしをするに誠に力なきものでございますが、ただこれがためにのみ「旧き人」を私達の内に殺して宿り給え。アーメン。先ず内に、否、終りまで内に戦わしめ給え。これこそ真に外に戦うことたるを教え給え。アーメン。

 Not thus were waged the mighty wars that gave

 The victory to her who fills this grave:

 Alone her task was wrought,

 Alone the battle fought;

 Through that long strife her constant hope was staid

 On God alone, nor looked for other aid. ──Bryant

 〔く戦われしに非ず、此のに

 ます人に勝を与えし激しきは。 　　　独りにてのはまれたり、 　　　独りにてそのは戦われたり、

 永きの果つるまでは絶えず神にのみ

 据えられたりき、しけを求むることは更になく。　──ブライアント（著作集第８巻『詩歌集』、「勝利者の墓」より）〕

伯母様を思い出し申し上げます。１６日。辰雄。」

〔この手紙は〕一つを出して、一つをとって置くことにした。〔嘉代子様宛の手紙貼付〕

１９２５年１１月１７日（火）

晴。ローマ書を通読。註解なくしてしんみり読むところには深きもののあるのをおぼえた。が内村先生の「ローマ書の研究」は一般の註解書とは異なる。所々難解のところを索引によって調べて釈然たるものがあった。よき午後であった。「ローマ書の研究」は勿論、序文より順序に読まるべきものである。そしてこれは死ぬまでの友である。何度読んでもよいものである。読むほどよいものである。新聞を３０分読む暇があったら、よろしく「ローマ書の研究」を繙くべきである。アーメン。

神経衰弱を今日は感じた。これは過度に身心を使ったからであることが今になってわかったが、僕は到底あの活動していた日々にこれを気づくべくもなかった。春から一気呵成にやりつづけたのがついに「腎臓結石」となって形にあらわれ、それがまた病中の読書等で回復をみずしてかくなったことを察する。しかし僕は到底かく毎日を過ごさざれば居られなかったのである。怠惰の罪なることを深く感じたこの１年はとくに今までの僕とはちがって勉強をした。それが急変であったため、やや無理も知らずに勤めたのであった。これからその分をまもるべくつつしまねばならぬ。しかしこれによって決して消極的な人間にならんとはしない。あくまでも積極的であらねばならぬ。信仰のあるところ必ず神様は助けて下さるにちがいない。これを確信する故に過労働の神経衰弱何かあらんである。

僕は相変わらず読書をつづける。続けずには居られないから。しかし、その時間を制限しよう。すべて信仰の律法のもとに。

朝７時起床。午前２時間、ドイツ語。午後２時間、ドイツ語。夜１時間、ドイツ語。その他は聖書とそれに関すること。夜１０時消灯。

然れども之、神の罰であり、その中に特別なる恩寵のありを確く信ず。罪に泣いたこと、聖書が唯一の書たること。器は誠に小なれど、内村先生、藤井先生の御恩、母の愛、兄の愛、伯母様の愛、これらのすべてキリストより出づるを知りました故に、全生涯の十字架たらんこと、聖旨のためならんこと、のために捧げんことを深く祈りたること。

母上、山本の姉上よりお手紙来る。母上の愛情に感謝し奉る。そのお言を守ろうと思う。侮り見ることの悪しきを知る。

昨晩は内村先生の夢を見た。信仰の先生のお顔に接して燃やされた。夢の中にて誘惑に勝った。今にして思う。大正１０年（１９２１年）１月から１１年１０月までの「ローマ書の研究」御講演をうかがったなら、僕はもっとはやく……と。しかしこの思いはなんにもならぬものである。日曜に１０時からこの貴きことが大手町にて行われいたことを露知らず、僕は一橋の日土講習会で代数幾何をやっていたのであった。あの受験時代の僕、しかして今の僕。誰がかくならんと思っただろう。神の御業は人の知らざるところにある。偉大である。感謝の外はない。基督教が思索によってなった宗教でないことはこれでも明瞭である。「神の啓示である」と先生の言われることがよくわかる。Revelation〔啓示〕である。故に神様の与え給うた時が最善の時、最好機であったことを信ずる。クリスチャンに何にかにと云う不満は一もないはずである。神のなさることに然り！アーメン！と従うのみである。

政美兄上によって、政美兄上の直接の声によって、大きい兄様の愛によって、大きい兄さんの真剣によって、僕は玆に覚まされた。１９２１年９月２２日から１９２５年１１月１７日までの月日は長かった。それは実に実に僕の今までの生涯中で最も変化の大なるものであった。そして、１９２３年の春と、１９２５年の秋１１月と、これほど僕を動かしたことはない。１９２３年の春は主イエス・キリスト様によって新生を受けたときで、これは忘れられぬ最大の転換期で、これは逆転を絶対にゆるさないものである。１９２５年の秋ははからずも病をいただいて、これが実に信仰の深みを一段と強くして下さったときである。

そして今日もなお、毎日々々深きへ深きへと導きつつあり給う。この頃とくにそれを感ずるものである。兄上の日記はこれを実に明らかにしてくださった。僕は罪に泣く、毎日はこればかりである。１９１９年の秋の兄上の日記が──それは今から６年前の秋のことである──強く強く僕の全身に沁み込んで読まれる。もうこれは言葉で言いあらわせない。僕は１頁毎に涙がながれそうであった。あるときは泣いた。大きい兄さんの真剣な祈りと人生を本当に真面目に神の前に歩んだその日々を知って、僕はどうしてその真剣にひかれずにおられようか。

兄は１９２１年に召された。すべて聖き祈りに終始して、そして神様は聖召を成し給うた。彼は去った。この世を去った。しかし彼の真剣は実に実にその短命に一毫の無駄もなく毎日々々が水晶の如く潔く潔くおくられた一生を終えた。

讃美すべきかな主の愛、主の御恩寵。彼の生涯をすべて主の十字架の故に感謝し奉ります。願わくは主よ、政美の弟なる僕をしてその如く歩ましめ給え。彼は全く全身全霊を主の御前に捧げ奉りて歩み、そして召されました。ああ、その美、その聖。

主よ、主よ、かかる政美の如く私も主にすがりて真剣に真剣にこの世の歩みをなさしめ給え。アーメン。

ああ１９１９年の秋、１９２５年の秋。彼の日記は僕の最大の友。天には彼の導きの星。

僕は詩人にならなくもよい。僕は僕の人生そのものを詩としたい。そして主に捧げ奉りたいのみである。詩の基調は、

主よ御聖旨なさせ給え、

主の十字架を常に仰がしめ給え、

主によりてのみ歩ましめ給え、

僕にも小さき一つの十字架を負わしめ給え、

常に罪に泣き悔改の生涯たらしめ給え、

でございます。僕は名のための小さき野心を全然なげうった。

「人の眼には小さき仕事であっても、神の眼には偉大なる深きこと」（兄の語より）

をせんことをのみ願い奉る。

多くの言いあらわしがたき祈りすべてきき上げ給え。深き信仰にしっかり歩ましめ給え。信仰強く、人を愛して、これからさきを益々願わくは主よ、アーメン。

１９２５年１１月１８日（水）

１２時の汽車で渡辺のおば様帰京さる。停車場でお見送りした。帰りに歯医者による。脈拍は相変わらずたかまる。平常が７０～８０であるが、歩くと９０～１００となる。

この家の方は真面目の何たるかを御存じない。それならばまだよいが、それ以上に非紳士的淑女的である。僕はそれを目撃する毎にある苦しみさえ感ずる。僕の愛は未だ足りないかと思う。しかし彼等はついに新しく生まれることの出来ない人間と見る。美わしいと云うところが全然ないと云ってよい位である。男らしくない、女らしくない。僕は僕の大切な道をあゆむ。それは云うをゆるさば彼等とは全然別な世界である。彼等は到底これを知るべくもない。彼等の魂はあまりにけがれていると云う外はない。

藤井先生に御手紙を書く。『旧約と新約』をまっていた。今日来た。「失楽園」の外は拝読。ことに今月号は有難くあった。それは審判に関して書いてあったからである。然り、「最後の審判」と一口に云うが、これを真剣に思うときに戦慄せずにおられるか。罪に泣かざるか。十字架にすがらざるか。問題はどこまでも真剣である。

“Life is real, Life is earnest!”〔はなり、はなり！〕 Amen!

１９２５年１１月１９日（木）

晴。あるときは深く沈みて泣かんばかり。しかるとき我が父なる神に切に祈りまつるより外なかった。詩篇５０篇１５節、

「なやみの日にわれをよべ我なんぢをけん、而してなんぢ我をあがむべし」

アーメン。友来る。彼に親切はあるも、共に祈る友にあらず。否、真に孤独にさせて戴くときに真に祈りまつることが出来る。共に語る人なき僕場語りたいときに、兄上の日記と高島の伯母様の御手紙を開く。そこに本当の信仰の友の祈りがあった。慰められた。力づけられた。

何で僕は神経衰弱だろう。そんなことはないはずだ。何で僕の心臓は高鳴るのであろう。そんなこともないはずだ。神様は必ず救い出し給う。

お父様、どうかこの苦難より救い出し給え。問題が重なって居ります。お父様、僕はただ聖手にすがって毎日を行きたくあります。どうか思い煩いなく送り行くことを得ます様に御力を与え給え。アーメン。

Daily Strength〔毎日の力〕に、

November 18 Last Evening (1919) 〔１１月１８日　昨日の夕（1919）〕

November 19 We are said 〔１１月１９日　私達は言われた〕

Walk strong, firm steps! 〔強く、確かな歩調で歩きなさい！〕

Love men! 〔人々を愛しなさい！〕

Entreat his mercy! 〔彼の慈悲を懇願しなさい！〕

We three prayed before Him! 〔私達３人は彼の御前に祈った！〕

とある。日記を拝読して涙に咽んだ。

「主は我らの爲に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3･16）〔独文と英文〕

我が政美兄上よ、かかるが故に深く深く感謝しまつる。アーメン。

ああ、主の愛！　これ知らしめたる兄の愛！

１９２５年１１月２０日（金）

半晴。罪に泣くよりほかに僕にすべきことなし。１９２３年の春に召されたと云いて僕はいつまで生ぬるく歩むのであるか。僕の問題は何より先にこれである。何故、汝はなまぬるくあるか。何故、僕はこんなになまぬるいのだろう。信仰は感情的なことが多かった。宗教書もよく了解できる。青線も本当に大切なところに引き得る。感受性はするどくある。しかし僕は未だ弱い。信仰が弱い。何故もっとしっかりしないのか。もういうまい。自分に言うまい。

お父様、お父様、どうぞ、僕を誠と信仰に化し給え。信仰にのみ歩ましめ給え。その外何ものも僕を支配すること勿らしめ給え。アーメン。

されど心を強くせよ。辰雄よ、泣くなかれ、悲しむなかれ。心を強うして神に頼れ。潔きを求めよ、聖きを求めよ、俗塵を脱せよ。彼等と共に思うなかれ、共になす勿れ、共に遊ぶなかれ。かかる時は大切なり。深く祈れよ、厚く思え。主、救い給う。主に依り頼むものは必ず救われん。アーメン。１９２５年１１月２０日午後１１時１０分前。〔星の研究。南天、冬の大三角形（ベテルギウス、シリウス、プロキオン）等の星座の図のスケッチあり〕

１９２５年１１月２１日（土）

晴天。起床７時。午前は武田の叔母様にお手紙、母上にお葉書で殆ど費やしてしまった。真剣であった。松濤が来て僕に告ぐるには、僕は休むなら２学期を全部休んでよいとのこと。それは第１学期の成績平均８０点だそうである。第３学期をしっかりやればよいとのこと。僕にとっては実に有難い報せである。

一体僕は第１年の１学期の試験なし。２学期、３学期ブランク。第２年目の１年は先ず先ず無事に学校はすんだ。第２年は第１学期なし、２、３学期ずいぶん苦しかった。第３学年、即ち今年は此くの如くである。夏休と合わせて５ヶ月の休校である。実際不完全である。こんなにむらがあってはならない。と思うがいたしかたない。今となっては。与えられたる残る日をつつしんでつかう。おくる。僕は実際、学校に出たくもあるし、出れば身体にさわることも思われるし、家に居れば病人の様で病人ではなくしっかりしているし、どうも妙な状態であるが、これを深く思うと、ここに神の聖旨の何ものかあるを感じて、云われざる畏れを感じて、よき日々をおくらんと切に思う。然り、事態、玆に至ってはするに及ばない。敢行せよ、信ずるところに従ってあゆめよ。ルッターが言ったではないか、

「罪をおかせ、しかしより強くクリストを信じよ」

と。然り。強き信仰の人たらん。万事はここに解決す。

「27されど神はき者を辱しめんとて世のなる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、 28有る者を亡さんとて世のしきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」（コリント前1･27～28）

２章１４節は実に一般不信の徒についてよく言われている。ことに基督教をすこし耳にしながら半信半疑の様な感じを有するものにとって適切な言である。

「14性来のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚なる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりてうべき者なるが故なり。」（コリント前2･14）

１９２５年１１月２２日（日）

聖日。の日。起床、散歩。

露ふけき　秋の　ただ独り

　　祈るは道の　ためにこそあれ。

と云う一首が口から出た。それはささやかなる流、しずかなる流の前に、朝日に向かってその清き流れとおとなしき無言の草との前にて祈ったあとであった。草葉に露がおりて、日の光に七光をいと微妙に映しているところ。ああ、その静か、その美わしさ、この小さな小さな四囲、あたたかき自然の友。友は無言なれど、主を讃えて居た。人の心のを清めてくれた。これぞわが友なると深く感じた。聖なる聖なる聖日の朝であった。人の子一人だに居らずしてよき祈りの出来たことを感謝した。遠くの山はまだ霞んで見えなかった。森の中から鳥か何かの鳥がすんで響いてくる。農家の障子が朝日を真向にうけてあたたかそう。それに庭の柿の木が投影して真赤な柿が七ツ八ツまわるい姿を模様ずけているところいかにも平和な野趣である。

聖日は、午前９時より１２時まで、聖書のみによりて。讃美歌19､90､214､171（とくに兄の日なる故にこれをうたう）。兄上も、高島さんの伯母様も言われます、「強くなれ、辰雄」と。ありがとうございます。どうか、天にて御二人、僕のために御祈り下さいませ。

主よ、強く信仰に歩ませてください。天のお祈りにかないてのみ歩みたくあります。アーメン。

日記、日記、それは迸り出でざるを得ざる故に書く。神を讃え、感謝し、祈り、自己の罪に泣き、悔改の生活のために書かざるを得ざる故に書く。それは一般の感想録とはちがう。後日のなぐさめのために書くのでもない。凡そ人、名と云う如きものを対象として書くのでない。ただきいていただきたいのは神様のみである。また自分の心にのみである。ときに人の心に問うて見る。しかし彼等に聞かせるよりむしろ祈るためである。

主よ、信仰の、ああ信仰の強く健やかなるものを与え給え。主よ、我が求むるすべては信仰のみでございます。どうか、この濁る四囲の空気にまよわされることなく、人の言に動かされることなく、主の御力によりて与えられる信仰によりて強くしっかり歩かしめ給え。主のよろこび給う僕たらしめ給え。貴き御名によりて。アーメン。

母上様よ、武田の伯母様よ、願わくは安けくあらんことを、わが為に。私は神様に静かにうかがうのみであります。独文科と独法とはその道、社会的に大変な差であります。一方は法律、一方は文学。法律も文学もそれ自身、僕の目的ではありません。さりとて勿論、生活のためにではありません。職業は生活のためでもありましょう。しかしこれは生活のためより何より私達の働きそのことであって、神に対する人のつとめ、義務であります。法律へ行こうと、文学へ行こうと（それは個人には外的に大きな差でありますが）、それ自身が私を支配しません。さりとて私は職業の選択をゆるがせにするのではありません。私は法律、政治、経済と云う方面の頭、性質に至って欠けたものであります。行けば行けないことはないでありましょうが、神様は無理に職業上に兄の跡をとれとは決して言われません。兄も生前に僕にそのことを言ったことを記憶します。兄と僕とはその才能、性質を大いに異にします。多く僕は兄に及ばぬものであります。しかし、兄と一致することが一つあります。それは良心の叫びであります。罪のなげきであります。十字架を仰ぎ見ることであります。復活の基督を信ずることであります。……その他。今は信仰に於て全く一つであると信じます。

かく私が高等学校で病気をし、そしてはからずも内村先生の御講演をきき得て、深く感じ、兄が高等学校の終りのころから基督者となったと同じ経路を兄によってとることの出来たことは、そこにどうしてもある聖旨をうかがわざるを得ないのでございます。高島の伯母様も私を大層愛して下され、使命の重大なるを云われました。また、藤井先生、佐藤先生を親しき師として戴くことを与えられたこともまた私に義務の一つを負わせられたことと信じます。そして私は独文学は未だ何も解しませんが、元来、英語もすきで語学が好きですから、独文科に行きたいと存じます。これらの色々なことをこの春から静かに神様と御相談いたしましたのでございます。神様は時々強く私を励まし給いまして、道を文科の方へ進め給いました。そこにはまたなかなかの困難もございましょう。しかし信仰によってこれらの困難はつらぬかれると信じます。元より僕は社会の地位、金銭上のことなどを問題としませんでした。「神様は必要なものを知り給います」と信じます故に。

かくして私は職業はやがて「先生」と云うものでありましょう。それでよいのであります。私は学生を相手とすることも楽の一つであります。僕は真剣に教えようと思います。それは独乙語及びその文学でありましょうが、ケーベル先生の言われる様にただ語学をつたえる機械ではないのであります。学生と共に学びたくあります。ただ真理をそのうちに。そして私はその外に福音のために働きたくあります。それがいかなる形をとるかは、今から知るところではありません。著作をするにしても、私は決して名のため金のために一字も書きたくありません。それは内村先生、藤井先生のお手本にならいて、ただ神が書かしめ給うが故にのみ書くと云うときにのみ書きたくあります。

兄上の『基督の復活』は岩瀬さんが出版業のためになにかと頼まれたに応じて書かれたのであって、自らどうこうと思ったのではなかったのであります。どこまでも謙遜な人生らしい人生を送りたくあります。そして、いつも

“ Hier stehe ich, ich kann nicht anders! Gott hilfe mir, amen!”

〔私はここに立っている、私はかくするほかはない、神私を助け給わんことを、アーメン！〕

と云う時の備えはして居たくあります。その時は先生もやめるかも知れません。私は普段はただクリスチャンとして生きればそれで結構であります。しかし、外の戦に出ろと云う御命令のときは、勇ましき戦士となって福音のためにはたらきたくあります。そのために今から準備であります。内村先生、藤井先生、畔上先生、塚本先生、佐藤先生等の先生にこれほど御恩をりて、私はただ自らを静かにして行きたくはありません。青年の使命をそこに確実に見るのであります。Ambitions〔大望〕でありますが、どこまでも聖旨のためのAmbitionsであります。神様が「出ろ」と云われるときに勇んで出たくあります。「然せよ」と云われるときに「然して」ある勇者でありとうございます。あくまでも神と共に、聖旨にしたがいて、聖旨ならば他の何者もおそれなく信仰に歩む勇者たりたくあります。

政美兄上の僕に望むところもこれより外の何ものでもないのであります。私に若し特別な使命があるとするならば、それは文科に入って居る方がえるものと存じます。かかることから、私は文科に参る決心でございます。

もはやかくなりましては、私は所信を人言によってすことはおそらく不可能と存じます。かくて私のすべての未来は信仰によりて敢行するの一事にかかって居ります。

願わくは、神よ、天の父よ、助け給え、力を与え給え。ただお父様にのみおすがりして苦しと思う道、しと思う道をしっかり歩ましめ給え。貴き主の御名によりきこしめし給え。アーメン。

兄上よ、僕は勉強したくあります。うんとやります。徹底的にやります。すべてに於てなまぬるを止めしめ給え。兄上がその信仰生活に於てよく歩み給いし如く、よくはたらきて──今はよく勉強することがそのこと──感謝なる、希望なる日々を送りたくあります。地上の兄上のあの快活、精力を思って僕の血も肉もおどるのでございます。此処に与えられた１ヶ月余りを独りで勉強させて戴きます。学校へ出たくも未だ不安の身体でありますから、思い切ってすっかり休ませていただきます。どうか、神様これをおゆるし下さいませ。どうかつまらないすべての考えを廃して、きよく送らしめ給え。人の誤解もすべてお父様にさばいていただきます。ただ独り、ああただ独り、御前に潔く歩かせて下さいませ。

私は謹みて申し上げます。お願い申し上げます。私はこれから１２月の２０日の聖日まで水戸に居させて戴きたくあります。それまで独乙語と国文学史をとくに勉強させて戴きます。願わくは、よきクリスマスを迎えさせ給え。願わくは、よき新年を迎えさせ給え。すべてよき一日一日のもとに。願わくは、よき新しき家へ転ぜしめ給え。願わくは、よき卒業のときを来らしめ給え。願わくは、進むべき道に進ましめ給え。アーメン。

１９２５年１１月２３日（月）

晴。。青木の叔父様、昨日来られ今日帰らる。隆さん来る。午後、青木の叔母、喬様来らる。千鶴代さんの第二世は三千雄と云う。三弦さんの三と千鶴代さんの千をとったのであろう。三千雄とは珍しい名である。意味はあるだろうが。

何しろ今日はあきれた。一つは叔母様の隆ちゃんにアマイこと。これこそ溺愛の好模範である。これはかねてから思っていた。禍なる哉、隆ちゃんである。彼も青木の子として終るだろう。一つ、わざわざ僕の読書の室で話をする。その厚顔の二人にあきれてものが云えぬと罵りたいくらいであった。しかし我慢した。僕は負けぬと、静かに読書していた。ついに神は「我勝てり」と云い給うた。彼等は散った。サタンの子の散ずるが如く。その話す舌は正に毒舌、偽善と虚偽と虚飾でみちていた。亡び行くは彼等である。

今日は歯の神経をぬいた。一日何も出来ず。さまたげられて不愉快である。しかしガンバッテすこしやった。僕は彼等と遊んでいられる身でない。そんなことは忍びざることである。僕の心事は彼等にわからぬ。

１９２５年１１月２４日（火）

晴。午前、病院。「脳神経衰弱」と云う診断書を戴く。脈は病院で１０６だった。しかし心臓はたしか。呼吸器がやや弱っているとか。それからこの脳神経衰弱で約１ヶ月の静養を要すとのこと。薬を戴いてくる。すべてよろしい。医師のされることはそれとして受ける。山田先生は親切である。お礼を云って帰る。まず病院には行かぬだろう。さてすべてはよろしい。私は私の途をあくまで忘れてはならない。私は神様の者である。私は神様を父として信ずるものである。私は絶対に父なる神様を信じ、服従する。神学とは哲学とか何とかそれはそれでよい。私は信仰の外に真剣なものを有し得ない。人生は信仰によってのみ真なることを知る。信仰はすべての源であるが、この信仰は即ち神、父なる神から賜ったものである。そこに聖霊が宿りますのである。私は私の現在を苦境と思う。しかしこれは私をたおすにはあまりに弱くある。私をたおすものは何ものもない。私をたおすものは私の中にある。私の信仰、これを失ったときに私はたおされる。このときに私は何者にも勝ち得ない。

私に父なる神、キリスト、聖霊なる三つに在まして一つなる神、宿り給いて私は私でなく、私はそのものである。私に価値のあるなし。私に善のあるなし。然り、私は無きも同然のものである。この霊をすべて神にゆだねたる、私自身の生まれつきのもののないものと云ってよい。かかることをのみ神様に毎日毎日お願いする。

私の周囲に居る皆様、あなたがたの御批評、毒舌、、称讃、等のすべては私を動かし得ない。それはあなたがたが神様を動かし得ないと同然である。

喬さん帰京。窪島さん来らる。喬さん、深くならんことをと祈る。

それは私が神様の枝となっているからである。この鋭き両刃の語はこれ聖霊に感じて出て来た。ああ毒舌の彼女よ、彼女はそれで教会員と云うことである。私は神様に捉えられてあまりに強くなったのに自ら不思議に思うくらいである。しかしいつも戦闘的な心で居ることもできない。神様はその最も深き愛をそそいで下さる。私も戦も愛によってでなくてはならぬ。そこにかの驚くべき力は更に強くなり、これをこの世の何ものにも比するを得ない。神の愛によりてすべて内にも外にもあらしめ給え。キリストの愛の中には義が含まれている。ああ、その３３年の地上の御生涯を思いて、その十字架を仰ぎ瞻るときに、私の心は全く砕かれて平伏さないで居られようか。

松濤が来てくれる。僕、歯医者へ行っていて留守、再び来てくれる。僕の診断書を出してくれるそうである。彼の友情には全く感謝する。彼の如き友を未だかつて見なかった。独文科を受けるもの、僕の外に僕を入れて３人。この分では大部居るらしい。大学の試験は苦しいかもしれぬ。よろしい。私は戦う。私が私の使命を深く感ずるときに、神様が私を助けてくださらぬことがあろうか。

来るべきときは来る。起こるべきことは起こる。すべて神は知り給う。私は毎日の歩みをしっかり行くべきのみ。アーメン。

煙草の煙と虚言の会話、僕はこの座にたえぬ。実際一人の真の心の友が居ないところに居ると云うことは、時々言われざる苦しみを感ずる。しかしである。神様が水戸へ置き給う間、喜んでいるべきである。喜んで。ああ、この言こそ基督者が心から神に申し上げたいことである。喜んでと云うとも、それは普通の意味の「喜んで」ではない。そこに深き「聖旨ならば」がある。

人に恩を帰せる者よ、その毒舌よ、私はきくにたえぬ。彼女は正に魔の表徴である。それを羊の皮でうているから実際見苦しい。しかれども、これらのことについて私をして怒らしむることなかれ。私は、ああ私は、神様だけを思ってさなければならぬ。私は、神を第一に考え、思いて、その愛に浸りてくらし、彼等のすべての汚物のこの身に来るを愛を以てかえさねばならぬ。私も汚れたるものである。それ故にこのことを本当にしなければ清くならない。クリスチャンとは実に成るに難きものである。イエス・キリストは実際、今のクリスチャンに「我が僕よ！」と仰る人を何人もたれるであろう。願わくは、聖旨にかなう僕たらしめ給え。ああ我が兄、我が兄は、すべてのこの世の醜悪を脚下にふまえて雄々しく清く歩んだ。願わくは、弟なる僕もその如く導き給え。今よりは誠に々々ただ々々このことをのみ毎日々々願いて行かん。ああ僕の思いは乱れた。悶え苦しんでいる。願わくは、神よ、誘惑のすべてに打ち勝ちて歩ましめ給え。僕はあまり神と共にと思う故に、とかく人に対して厳然として感情を害する様である。愛がたりない。愛を与え給え。

けれども、お父様、これ本当に難しくあります。彼等との会談に於て、彼等がその貪りの語、虚栄の語、……などを発する毎に、僕の心を痛め、そのために僕の顔は鋭くなって来、口もだんだん強く、数すくなくなって来ます。すると彼等の感情を害します。そしてあとで、愛が足りなかったと思います。願わくは、このことをなおさしめ給え。願わくは、はじめより愛を以て語らしめ給え。終りまで愛を以て語らしめ給え。彼等の毒舌をやわらがしめ、彼等にひかれることは勿論なく、彼等を引き給え。神様、お父様、お願いしたきこと実に多くあります。お父様はこれを皆御存じで居られます。どうか一つ一つ、知らぬ間になおさしめ給え。信仰によってのみ、ああ信仰によってのみ。すべての愛の行、信仰の行は皆、真の信仰から。願わくは、信仰を与え給え。アーメン。

ああ、クリスチャンとは気狂であるか、とか言うものは言え。我が神、わがお父様、願わくは、私を全く御身への捧げ物となし給え。貴き救主の御名により、アーメン。１９２５年１１月２４日、夜１０時半。

然り、独文学科へ、猛進！　主よ、絶大なる力を与え給え！　何ぞこの世の君たる子等に負けんや。死に至るまで福音の戦士たらしめ給え。

パウロの如く、ルッターの如く、クロムエルの如く、バンヤンの如く、リヴィングストーンの如く、グラッドストーンの如く、ゴルドンの如く。政美兄上の如く、内村先生の如く、藤井先生の如く、畔上先生の如く、塚本先生の如く、佐藤先生の如く、高島の伯母様の如く。ただ主に、ただ主の僕としてのみ、この小さき身を捧げしめ給え。アーメン。

１９２５年１１月２５日（水）

「そは神の我らに賜ひたるは、臆する靈にあらず、と愛ととの靈なればなり。」(テモテ後1･7)

小魚売りのお爺さんが来る。彼は一見正直そうである。その語るところによって直ちにこれをさとった。しかるに貪婪なる彼女の言うところは如何。３円５０銭を３円にまけろと云う。売るものにとって３円５０銭から５０銭ひいたら、如何にその利は少なくなることだろう。彼はやや泣き声でその純利を語った。３円では正に３ガンの様であると。それでは何としても売れない。それで結局どう彼女は彼をせめたかというに、やれそんなに多くては重すぎるとか、電車賃とか、車賃とかまで言い出した。それで彼は云う、

「それじゃ、奥さん、その車賃を出してあげますから、まあこのおいしいのをめしあがっておくんなさい」

と。僕はこれを聞いたときこの室で独り涙ぐまざるを得なかった。彼と彼女の人格を思え。それは雲泥もただならざる差である。彼は人である。彼女は獣である。彼は神の善しとし給う子である。彼女は悪魔の子である。彼女は相当の富を有する。そして３円５０銭を払わず３円３０銭。彼には殆ど儲けにならない。その価でとうとう売らした。ああ、この２０銭。彼の如き貧しき田舎の小魚売りにとって一日の２０銭は少なからぬものである。これに反し、彼女にとっては２０銭は何であるか。もし彼女が人であるならば、彼を見てあわれみの心が直ちにおこるべきであるのに。僕はもし彼女と対当の年の人なら、彼女を一喝してやるところであったが、叔母なるを如何んせんであった。しかもこの３円５０銭さえ、本当は３円７０銭のものであるのをまけさせたのである。そして３円５０銭を３円とがんばるには、彼女の新しき家庭の主婦なる人のたすけによりてであった。ああ、共に基督者だそうである。驚くべきこと。僕はかかる嘘を以て飾られたる偽善の家にいる。僕はその会話中、読書が出来なくなり、彼のために祝福した。

「幸なる哉、義のために責められるもの、天国はその人のものなればなり」

貪婪なる者等、恩を人に帰せる者等に厄介になっていると思うと、たえられぬ苦しみを感ずる。然り！

僕は彼等の心をよく知る。彼等の求むる以上に常に払う。問題は金でないからである。しかも、彼が礼を言って帰ったあとですぐ彼女等は何を云うかと云えば、とくしたと云うことである。彼に言った正反対のことである。これではまだ足りないと。ああ、僕は全く驚いた。これが親戚の人か。僕は絶交したい位に思う。自分等の知識と金とを以て人生をあやつって行く驚くべき悪魔の子。かかる人が現代の多くである。人のことはどうでもよい。自分の利、安楽、それのみが目的。人前の口上はどうでもうまくやってと云う主義。それが僕には実によく洞察出来るから、僕にとってみえすいた虚偽、偽善。これらにされる人々よ、汝らは不幸である。しかし、正をふめ、神は彼女等悪魔になにをなしたもうかを見よ。神にまかせよ、審くな、である。Vengeance is mine!〔復讐するは我にあり〕と云われる。

悪魔の子らと考え方の根本がちがう。故にいくら僕が和らがんとするもあたわない。彼等の言行の一つ一つがそこに不和の種子をまく。世の流れに全然浸れる彼らと僕とに一致がありようはずがない。今日は

「豚に真珠を投げるな」

を感ぜさせられた。彼等の嘔吐をもようさせる様なすべては全然僕と反対である。そしてこの人々は世にもわけて貪婪、吝嗇、虚偽、偽善なる心の人なるを知る。どうもこれは極言の様だが、どうも已むを得ない。もう水戸に於けるはじめの（彼等に対する）望みは放棄せざるを得ない様なものであるが、

「汝のパンを水の上に投げよ」

なるが故に飽くまで私の私たることだけは貫こうと思うは、はじめと変わりない。それまでである。あとはどうなろうと神様がよくし給う。たぶん彼等は審かれるであろう。のぞみなき世の子らよ。

今日は佐藤繁彦先生から御手紙が来た。先生の御謙遜とその義なることに感謝し奉った。僕が先生にお手紙をあげたのは１０日、ルッターの誕生日であった。御多忙な先生はこれを忘れ給わないで、１２月の原稿を脱稿して第一に僕へ手紙を書いて下さったとのことが文面によってうかがわれる。僕の感謝は非常なものである。しかも冬休みには在宅しているから遊びにこいと云われる。是非、参上したいと思う。図示さえして下さった。御親切くある。ルッターは改版のであった由。安心した。なおさらうれしくある。

夕方、那珂川の橋上に立った。その西方、夕陽将に没したところ。すみ渡った空、川の上を渡る膚寒き風、遠くのクッキリと描き出された黒い山、その他何とも云えぬ夕景である。月が東天にかなり高くかかっている。夕の明星が輝きはじめた。広々としたそのながめに、その自然の聖と美に僕の心は詩的ならざるを得なかった。

都の人の禍なる哉！と思った。人生の美わしかるべき方面をのがし行く人々を思った。何人もこの天を仰ぐことが出来る。そしてこれは人生を崇高へ導くものである。天は嘆声を発せんためにあるのではない。一時の感情的な感傷的な嘆声のために歌われる天ではない。天はどこまでも我々を支配し導くものである。言い難き愛、望みが有るところである。

たる隣室の声に到底、読書をしんみりとなし得ず。若しこのことが来春続くとしたら僕は殆ど勉強をさまたげられてしまうであろう。ああ、もうすこし考えて戴きたい。僕は大学を受けたい人である。勉強をしたい人である。それを思ったら、も少し子供との喧声をやめてもらいたい。

１９２５年１１月２６日（木）

晴。１２時の汽車で青木叔母御帰京。停車場でお見送りする。夜は隆ちゃんとおばあさんとのさわぐことなく、やっと静かに読書。一日、口が絶えることないほどおばあさんは隆ちゃんに溺愛して居られた。

今日、右上の小臼歯２枚の金環、今日で終る。１０日間位である。飯田さんは親切な人である。愛嬌と云うほどのものはないが謙遜な人である。すべて１７円であるとのこと。２０円あげるつもりだ。それは三弦さんの紹介であるから、むこうもきりつめたことを思うからである。どうして東京のボリイシャだったら５０円は優にとることだろう。とにかく、かかる人になおしていただいたことは僕は嬉しくある。僕の人生の小さな一つの美わし点をなすものである。よき人と交わることはそれが１週間であろうと人生の美わしき点をなすものである。交わる人はかかる人。かかる人は僕にとってかの馬鹿どもが吝嗇のために目をつける様な人間らよりはるかに美わしくある。

松濤きてくれて、小牧先生が問題をすって下さるそうで、それを２枚今日とどけてくれた。２題（４題中の）はケーベル先生の小品集から出ている。さっそく気がついた。僕もこの間それに青線を引っ張って感じたところだったのである。

「キリストの愛われらに迫れり。……」（コリント後5･14）〔英文〕

政美兄上の様にかたっぱしから片づけて行きたいものである。またもりもりと読書する。精力は回復されつつあるのである。薬は僕に信用がない。精神のことは精神のこと。

１９２５年１１月２７日（金）

晴。一日の労は一日にて足れり。今朝起きて今日一日のプランをたてて、進んだ。神よ、願わくは、よく読ましめ給えと。かく信仰に立ちたる一日は実に感謝であった。よく読書が出来た。夕方は一寸散歩をした。ただ一人そのがけをおりて泉のわきを通って、葡萄畠をぬって畠に出た。が鍬をかついで帰るところであった。半円形を描く様に東の方へ歩をはこんだ。１２日の月がのぼっていた。讃美歌を静かにひくくうたいながら、またべつな坂をのぼって帰った。この紅葉と銀杏の葉は散歩のみやげである。この秋を記念するために日記帳におさめることにした。〔もみじといちょうの押葉の貼付あり〕

今日は歯医者に２０円払った。３円はお子供さんのお菓子に。僕は出すとなるといつも大きい。本の大なるを買えばすぐ５円や１０円となる。薬、ことに神経衰弱の薬は無駄の骨頂であるが買わされた。ほとんどのまぬ。神経衰弱にきく薬はそんなものではない。信仰と云う薬である。僕が神経衰弱とはまったく一般の神経衰弱でないこと明らかである。

今日は、ヒルティー、ケーベル、ホルの「ルッター」、聖書コリント後書、イザヤ書、「体験宗教の研究」を読んだ。兄上の日記は夜静かなときに読む。彼等の落ちつける語である。

冬らしくなって来た。晩秋も本当の晩秋。日は実に短い。しずかな月の夜、たる空。

願わくは、導き給えと祈るばかり、９時のお祈りに。

１９２５年１１月２８日（土）

晴後雨。午前８時半起床、寝坊した。朝食は美味しい。午前はヒルティー。お昼、ちゃんにお見舞を書く。散歩を一寸とする。入浴。「ルッター」を読む。「義とせらるること」のところ。ところどころ強く感ずる。勿論まだ明瞭に解らない、文章そのものは。原文が日本文位に読み得る時がまたれる。勉強しなければだめだ。藤井先生も佐藤先生も期待して居られる。僕の重任誠に大なる哉である。内村先生をはじめこの少数の真の基督者のあとをしっかりふみたいばかりである。一日一日が実に（小なりと云えども）基督者にとって大であり大切である。結局、基督者には一日と云うものの外になにもない。これは単位であって全体である。感謝なる恩寵なる一日一日なる哉。しっかり歩まんのみ。かくて何の思い煩いかある。マタイ伝６章は誠にありがたく胸にしみる。

雨の音が戸外に、プッ、ポッ、パッ、ピン、ブン、ベン、バラ、サラ。あるいは葉に、或はトタンヤネに、あるいは戸板に、あるいは地面に。静か、比較的あたたか。

この間、彫刻展覧会（いばらぎ新聞記念館楼上）でダンテの胸像を買って来た。神曲３冊の上に安置してあるのが電気の光に黒き苦き面を向けている。かかる面こそ我が友である。

１９２５年１１月２９日（日）

晴。聖日。詩篇第６篇を読んでいるときに、松濤が来た。彼は現代青年の社会主義的傾向を非常に憤慨していた。それは誠に同感であった。さて、彼は宗教或いは哲学、これを区別するはわるしとなし、もっと一つにして、いかにして人は本当に生きて行くべきかについて考えている。それも正当である。ただ宗教と哲学は学問ではない。生きているものでなくてはならぬ。ところで、彼もまた現代の宗教を罵っている。これも正当である。しかしである。宗教は、本当に宗教は人の思惟でなるものか。然らずと思う。そして人が本当に行くべき道は人の努力、思惟、修養からではなく、神から来る信仰によってである。神もまた人が考えたものであるか、決して然らず。哲学的に考えて行くと、神はなかるべからざるものとなるだろう。しかし宗教は、体験の宗教は、決して然らずと云う。そしてこれは僕の体験にしてもまた然らずと云う。神は在まし給う。それは人の考えからではない。神が在まし給う故に、人はそれを感ずるが故に、である。

そこで彼は宗教を言わば新たにつくらんとするか、生かさんとするかしている。そして彼は非常にそれを人を救わんがためにと、方法に努力している。それも忠実な考えでよいことであるが、それがついに実をむすぶものならざるを知るときが来るであろう。僕は今から彼にこのことを言うことは出来ない。僕らはこのことを預言し得る。

彼は、現代人にナザレのイエスを信ぜよ、と云うことはあまりに現代的でないと思っているかも知れぬ。そして現代人のために現代的のふさわしき一つの宗教なかるべからずと思って、そのために努力しているのかも知れぬ。もし然りとせば、それは大なる誤りである。宗教はそれでは力がないのである。ナザレのイエス（と云うさえ僕には苦痛を感ぜしめる語であるが）、彼を信じて本当に人が人なのである。

この間のことは到底、筆紙にあらわせぬ。体験にまつより仕方がない。勿論かく言いて、「人は人、我は我」と云うのではない。あくまでも福音のために戦う。べんとする。しかし本当のキリスト教は決して今一般の人に感ぜられる様な偏狭なものでない。それは到底一通りのことではわからない。

まず罪に泣くこと、これがなくてはキリスト教はわからず、そして、人は罪に泣くことがなければいかに宗教、哲学を云々するとも、また新しき生けるものを生まんとするとも皆、駄目である。罪に泣いて、救はどこから来るか。……（後略）。

松濤とはいつか論じて見たい、真剣に。そしてそのとき僕がキット負ける。それもよく今から知っている。それはこの体験ある僕と、僕と同じ体験なき彼とのに一致し難きことを知るからである。なお云えば、僕は主イエス・キリストを信ずる故に、イエスをキリストと信ずることを体験せざる彼とが一致しないことは当然である。これを以て僕を狭しとなすか、するならしてもよい。やがて、ああ、それは竟に地上では駄目かも知れぬ。やがて、そのことのいずれが人の本当であったかがわかるときが来るであろう。ただ祈りて人々のためにあらんのみ。我に力なし。我に救う力なし。

聖日を聖日らしくすごさせて下さいましたこと、本当に御恩恵と深く感謝しまつります。本当に今日は一日、力と歓びとにあふれました。どうぞ、明日から１週間よく読書せしめ給え。ことに独乙語の本を読ましめ給え。アーメン。

四郎ちゃんから手紙が来る。彼、風邪。やや元気のない文。お気の毒に思った。しかし彼が僕に対する親切に感謝して早速返信した。

どうか僕も身体を健康にさせていただいて、人のために働きたくあります。たる現代青年の迷い行く流れ、社会主義とか何とかかんとかすべてあわれむべき傾向ばかり。そこに於てか僕の責任たるや大である。身は小躯なりといえども、大思想を抱かせていただくに十分であること深く感謝である。

この身のすみからすみまで神のである。己れの思想は１ミリ立方も容るることをゆるさぬ。全身神の力に溢れてあらんか。我に致する何ものかある。真理を真剣に研めて戦わん。

相変わらず日記の上で政美兄上とお話し。然り！然り！アーメン！であった。

三弦さん、僕がヤスッポク、経済に出来ていると云って茶化した。そうかも知れぬ。しかし僕は三弦さんに真剣に言うことが出来ない。何となれば三弦さんと僕とは年が８ツもちがい、僕が本当のことを言うと生意気に見えることもあるかも知れないし、また、信仰から出る言葉は到底、解せられないからである。それで、一般の言葉しかださず、また多くは冗談まじりに言ってのけるよりほかない。それを僕がわりあいにオンチとか、子供ッポイとか、安ッポクできているとか言いたければ勝手に言わるるがよい。僕は腹もたたなければ、何とも感じない。かえってそういうことを言う人の品性を自分から言い現わしているものである。彼等の金銭上キタナイ心のあるのを僕はよく見抜いている。故に特別に僕はキレイにしなければならない。こんな２円や３円の損益などは僕の問題でない。人格を損するほど損なことのないこと──これは彼等に言うときにのみ損と云う──損なことはないのである。損益を云々する人の禍なる哉。何事ぞ、金銭にガツガツして眼を丸くする彼等、現代人。ああ、もうよす。

聖日にこんなことを書いて本当に悪かった。どうぞゆるして下さい。僕はどこまでも正しく潔く歩みたくあります。こんなこと書いたこと本当におゆるし下さい。

１９２５年１１月３０日（月）

晴。朝起きて１週間をよく歩ましめ給えと祈る。Für Schlaflose Nächte〔眠られぬ夜のために〕は Für Hellen Morgen〔晴々とした朝のために〕で、１１月３０日、これはおそらく一番長い章だろう。

父なる神を信じ愛することを知らざる現代人、哲学者、宗教家、神学者、……禍なる哉。

宗教的とか、宗教とかは今の人間には妙にひびくであろう。彼等は全くあやまっている。宗教的と云うことは本当の意味に於て、本当の人間的と云うことなのである。宗教とは決してでも何でもなく、宗教とは本当の人の学と云うことである。僕はかく信ずる。第一原因は宗教である。最大のことは宗教である。目的なる終局のことも宗教である。人間のすべてのことが宗教をとせざれば──この真の宗教に本づかざれば──人とは一体何であるか。神なくば人とは何であるか。神を忘れた人とは一体何であるか。

神在まし給う、故に我等はある。そして父なる神を忘れたる一切のことはすべて死である。人でない。人はそんなことをするものとして造られているものでない。かく、すべてのすべてとなる父なる神を忘れたる人は禍なる哉。僕は父の愛し給う人のうちの一人として叫ぶ。然り、タダのクリスチャンとして僕は神の聖旨のままに送りたくございます。

「兄弟よ、おのおの召されし時のに止りて神とに居るべし。」（コリント前7･24）

であります。僕の現在のつとめは高等学校生としてよく勉強すること、これよりほかにないのであります。そしてキリスト・イエスに召されまして本当に福音を有難く思います。色々と考えたり、読んだりしますうちに、どうしても「福音！」と思いました。また毎日々々の生活それ自身に於て福音なくば生くるすべなきを知らしめて戴きます。一切の傲慢をころし給え。一切の不遜を殺し給え。十字架のお救いなくば生くるすべなし。アーメンでございます。願わくは、神様、お父様。

もし僕に出来ることならば、もしさせて下さいますならば、福音の道伝えんがためにこの小さき身を使い給え。いかなる形に於てこのことをなさしめ給うかを存じませんが、どうか少しなりとも世のためにこの道をひろめしめ給え。身はどこまでも一人のクリスチャンとして、すべてのこの世の汝をし給うことなく、ただ僕の肩書がございますならば、それは「クリスチャン」ただこれだけで、否、これだけでこそ本当に有難く有難くあります。クリスチャンとして願わくは使い給え。僕は、独文科か、宗教学科か、教育学科か、哲学科か、西洋史学科か、何れかに職業上行きたくございます。とにかく、文科に行きたくなったことは、神様とのお話でおきき下さったのでございます。そして独文学科に入りたいのがどうしても第一である様でございます。この問題はこの暮といたしまして、ともかくこれから半月をよく勉強せしめ給え。独乙語を主として。願わくは、お導きのままに。主よ、みこころをなさせ給え。アーメン。

１９２５年１２月１日（火）

晴。起床８時。午前、室にて読書。午後もまた読書。しかし時ののろいのに嘆く。精力集中である。散歩。小学校６年と１年位の兄弟にあう。弟ころぶ。兄曰く「強い強い、自分でおおき」と云って彼は先に進む。弟泣かずにこらえた。起きた。跡を追って走った。その一場の光景がいかにも僕を感ぜしめた。川へ出る。橋の上で夕照を望む。が下をたくみに通る。人が忙しそうに家路を急いで居る。働く人、幸なりと思った。最も今、だらしのないのが僕だろう。学生である。而も学校に行かずしてブラブラして居る。働く人に申し訳けない気がした。この点で大いに兄、姉に恩をって居る。「ただゆるしていただくのみ」である。僕のすべてのこと、みゆるしなくば、である。しかし道行く人の話声は必ずしも恵まれて居ないことを知る。彼等の働きが本当に喜ばしくなされるために僕は起たねばならぬことになるだろう。

喬さんからこの間帰りに僕が停車場に見送らんとしたのを固辞したことの悪かったことを葉書で言って来た。窪島さんがそう云われたからそうかと思って書かれたよし。喬さんに恐縮する。しかしあのときあれほど辞されたのは、何か僕が居ては窪島さんとのお話が出来ないことでもあるかと一寸僕の心に閃いたときに、僕はいさぎよくそれではと云って郵便局でおわかれした。その直覚がっていたか否かは知らぬが、もしそうでなかったとしたら、あれほど辞するは僕（見送る人）にとって不作法ならんとかも知れぬ。しかし僕はそれほどにも思っていなかった。それからあのとき窪島さんにすこしお話ししたいことも僕にないでもなかった。それはいつか折を見て手紙ででもお話ししようと思う。それはおそらく３月学校を出ることが出来たら、そのときであろう。

今日思った、誰々によってとは云いたくないが、しっかりした人が少ないと云うことを切に感じた。僕が本当にしっかりした人と云うときにどうしても本当に信仰のある人と云うことを意味せざるを得なくなる。

１２月が来た。何をはかるべきか。何もない。ただ毎日を「しっかり歩む」ことあるのみである。

哲学は論じて神の存在にまで及ぶであろう。しかし果たして、所謂哲学、宗教は力をあたえるか。力をあたえ得ぬものは根本の真理でないと僕は思う。生ける、はたらきかけるものこそ真理なりと思う。ここに至りて、基督の福音、更に言えば、キリスト彼御自身が真理である。神にしてキリストにして聖霊なるイエスのみが真理であると思う、信ず。これをせましと云うものは云え。僕はただクリスチャンでよいのである。僕はただ、主よアーメン、と云うのみである。

「神の約束は多くありとも、然りと言うことは彼によりて成りたれば、彼によりてアァメンあり、我ら神に栄光を帰するに至る。」（コリント後1･20）

独文科か、宗教科か、哲学科か、教育学科か。神よ、いずれか一つを選びて与え給え。アーメン。

母上様から愛に溢れたお手紙が来た。感謝の涙をうかばせた。これが三弦さんのと同封であったこと、そして彼がおそらく読んだこと、誠に遺憾である。彼の如き人はこんなことにさえ信用が僕にない様である。もっと精神的にしっかりして戴きたい。三弦さんをどうこう云いたくない。人を批評するのは気持の決してよいものでないから。これ自分を審くものなる苦しみを感ずる故に。

……会と云いて芸妓をあげなければ出来ない現代一般社会の会、酒と煙草と女によってでなければ出来ない会、社会、それを悪と知りながら、断然拒み得ないナマヌルの偽善者、堕落の禍の世、火にてやかれよ！

１９２５年１２月２日（水）

晴。金を貪るものよ、人を貪ると口に云いて自ら貪る者よ、その人の亡びの道たるは事実上あかしせられたり。禍なる哉、心の悪しきもの、空なるもの、それが……博士とか、……学士とか云う人の間にあるのだから、もうあきれるほかはない。

愛なる哉、偉なる哉、聖なる哉、我らの主イエス・キリスト様。この身のいかに汚れたるかな、偽なるかな、空なるかな、罪なる哉。牢獄につながるる罪人が罪人なのでありません。私が罪人なのでございます。今日なりとももし警察官が来たら牢獄につながれるを決して拒み得ないものであります。しかし牢獄は私の罪をきよめ去ってくれません。貴神を仰ぎみ、その十字架に目をむけ、御足にすがってのみこの罪はゆるされることをゆるして下さるのでございます。願わくは、ゆるし給え、きよめ給え、みこころなさせ給え。アーメン。

カントを知らんとするならば、深き苦しみの思考が要る。ルッターを知らんとするならば、更に深き苦しき体験が要る。一人は哲人、一人は宗教の偉人。一人は人の人、一人は神の人。しかして人は、人の人にあらず、神の人である。故に本当の人たらんとするならば、カントによらずして、ルッターによらざるべからず。ルッターを研究することは決して「ルッターを研究する」ことではない。他なし、キリストをたたえんこと、キリストの愛、福音を知らんこと。更に、ルッターと共にアーメンと云わんことに外ならない。もし毎日の歩みを忘れてルッター研究をするならば、ルッターは怒るであろう。

独文科か、宗教科か、教育科か、願わくは、いずれかをえらびて与え給え。アーメン。

１９２５年１２月３日（木）

晴。僕は一体、正義を非常に強く意識し、正義に関する話（小学校のときから）は好きで一心に聞いたものであった。かく強く正義、善なる観念を有しながら、主張しながら、自分はおそるべき罪に居た。実行するに至って弱き意志を有っているものであった。強く感受しながら一方、悪の誘惑にうちがたれやすかった。中学の３年、４年の頃はとくにこれを深く感じた。同僚の不正不義をし嫌った。若し僕が偉大な体躯の人であるならば、おそらく随分同僚をなぐったであろう。しかし僕にその力（暴力）はなかった。しかし弱きながらも正に対する道念に駆られて随分人にはきらわれ、孤独になったこともあった。

「汝なさざるべからず」とは僕を深くいましめた。しかし僕はいくど計画していくど敗れたであろう。実に惨たるものがあった。どうして僕はこんなに駄目なんだろうと一時は随分悲観したこともあった。座右の銘の如きをつくって机にはりつけたこともあった。しかしその律法はついに僕に何物も果をむすんでくれなかった。そしてその弱きを僕は自分の意志薄弱に帰して、自分の劣等なる人を自らみとめざるを得なかった。

キリスト教がかくの如きものなるを誰かが示してくれたらと、今から昔を思って残念である様にも思うが、やっぱりそれは残念でもないことを知る。何となればキリスト教に入るまではどうしても今日まで神様が僕に示された道をたどらなければ、やっぱりならなかったからであると信ずる故に。この信仰こそこの意志薄弱なりし僕を一変せしめた。いかに今でも罪はおかすとも、内なる人は全く旧き人と別な人である。

意志強固、薄弱と云うことは、比較的のことであって、信仰なき人には意志強固と云うも大したものではない。それは生まれつき薄弱な人よりもめぐまれてはいるかも知れぬが、この福音に入ることはいかなるものも比較し得ない幸である。

今これを感じたので、記さざるを得ぬのである。神様、お父様、願わくはこの信仰の道をまっしぐらに走らしめ給え。貴き御名に於て。アーメン。

政美兄上の親友たりし粟屋仙吉様にはじめての御手紙を感慨にみちて書く。中山博一様、粟屋仙吉様を信仰の友として得たことは本当に有難くある。佐伯さんが信仰的にどうであるかを僕は知らないが、兄上があれほどの友として居られた人だから本当なら御交際したいのであるが、どうも信仰が如何であるかをあやしむ様なのは困ったことであるが、いつかこの迷いがとける日が来ればと願っている。

この間、中山さんに一度、桑原（高島）嘉代子様に一度、それが御返信のないこと。中山さんはお忙しいのであろう。嘉代子様はなにか思うことあって御返事下さらないのだろう。それは僕のためか、何のためかわからないが、とにかく善意に解してあやまりなきものであると信ずる。

とにかく、すべてはよくある。僕は信仰によっておすがりしよう。近いうちに藤井先生、中山博一様に一度ずつ出そうと思っている。それは２０日の聖日には藤井先生のお集まりに行くつもりであるから。

「ルッター」１５３頁まで読み終る。約６００頁の本の４分の１を２ヶ月で読んだわけだ。僕にしては大出来である。しかし決して皆はわからなかった。独乙語の力のないことを切に感じて泣きたくなる。もっともっとだ。やりたいことは山よりも海よりも沢山ある。しかしあせってはならぬ。自分の一日あたえられる分量を越えて貪ってはならぬ。知識とても決して貪ってよいものでない。世に貪ってよいものは一つもない。一日は一日。クリスチャンの全生涯は一日と同じ。

１９２５年１２月４日（金）

晴。冬に入っての第４日、朝もなかなか寒くなった。しかし朝の気がすがすがしい。

神よ、独文科か宗教科か選び給え。

読書にありては、一読のあと必ず何が書いてあったか、その大要を更に考えて見るを要すと思った。主にあって真理と見たことは信仰によりて断行すべし。

１９２５年１２月５日（土）

晴。時は来る、しかしあわてぬ。時は来る、ただ主によりて。来らば来れと迎えんのみ。

ヒルティーの『眠られぬ夜のために』を今年中に読みおわる。これは毎年、毎日友とすべき書。良書は金と問題にならぬ。買うときは高いと思って９円のお金は随分ひびいたが、これは死ぬまでの９円だから、１日１銭にもあたらなくなる。良書は金と問題でない。金を蓄えて使うことを知らない守銭奴の愚がおかしくなる。僕は与えられたお金を粗末にしようとはしない。ただそれの大部分は良書、良きことに費やすばかりだ。いわゆる貯金なんか要らぬ。生命保険とか何とか文明人は余り心配、工面ばかりして生きている。禍なる哉、文明人。決して原始人を礼賛するものでもない。ただ、もっと精神的に生きなくては駄目だと警鐘を打たんばかりである。

一律に基督教に帰れとは進めぬ。しかし、何が最大の真理、何が本当の力、生命、歓喜、感謝、希望かと云えば、疑いもなくキリスト教である。キリスト彼自身である。その外の何ものでもない。ただ、しかしそれを万人に強いることは出来ぬだろう。皆、仏教……とめいめいのいいところへ行くだろう。しかししそれでも真理を求めんため、誠に生きんためならまあよい。しかししかしである！

１９２５年１２月６日（日）

晴。午前、聖書、申命記研究。１０時から１１時まで友達が来て話す。１１時から１２時まで聖日の午前らしく聖書と讃美歌にて。ただ讃美歌を心なぐさみだか、口ずさみだかしらぬが、意味もなく歌っているのを聞いた時には、自分は黙して歌わざるを得なかった。

午後また松濤が来る。高校生の中に社会主義的傾向の大分あること、及び警察にまでも注視されていることを聞いた。しかし無事に事をおさめるらしくある。社会問題研究をやめろと今の人をおさえるのは悪いだろう。研究は之をみとめるべきである。研究する人はその真面目さを以てしなくてはならぬ。無闇に宣伝的になってはならぬ。ことに叛旗をひるがえす的の態度はよくない。

松濤と散歩をする。図書館のうらの山から東方北方の平原をのぞみ、はるかに阿武隈山脈をのぞんだ。その斜陽に映ずるすがたを望んだとき、モーゼが約束の地カナンを望み見たときの光景を自分の地位になぞらえて想像させられた。偉なる哉、信仰の人と思った。

色々仏教の勇者松濤と語った。真理のためにともかくも心は一つである点から、実に快談をなした。彼と踏切場まで見送って別れた。今日のこの丘上の感慨と談話は忘れられぬであろう。僕に言わせると感謝の情と云うか、実にこの一日に対する感謝の情は真剣に基督教を体験しなければ、と思うが。それは彼が仏教徒である（所謂仏教信者ではない。将来改革者たらんもの）彼に今すぐにのぞむは無理でもあり、人の信仰をさまたげるものであると思ったから、そんなに言わなかった。とにかく、彼は誠実な人、光をこのむ人なる故に決して不快ではなく、随分然り！と云うことがあった。とにかく、今有する友の中で彼は（同級生や水戸の人々）最も僕とあった人である。

ドイツ語で会話をした夢を昨夜は見た。とにかく実際の僕よりよほどだった。寝る前、色々と瞑想にふけった。それを今おぼえていないが、神の栄光のために！と云う祈りが最後であったこと、非常な希望のもとに眠りについたことをおぼえている。

１９２５年１２月７日（月）

晴。戸川秋骨の凡人崇拝論（紙上）を読む。彼もまた迷える人と思った。キリスト教を生かじりした人である。故にかく迷える人なのである。それで、カーライルの英雄崇拝を訳したり、「クロムエル」を訳したりしたのだから驚く。彼にクロムエルを訳する資格はない。彼の訳によって１９２３年の春のクロムエルを知ったが、彼は金のためにこれを訳したのか。しからば彼の訳本は寸断したくある。そして自分が原書で読まなかったことを悔いる。これからつとめて原書で読むことにする。信仰のない彼にクロムエルの本当のところがわかるか。クリスト教をしている語を読んだときには（この論文にて）あまりの浅薄さにあきれた。

信仰のないものはクリスト教を云々することが出来ぬ。また信仰のあるものはクリスト教を云々することは出来ぬ。結局、クリスト教は云々することの出来る宗教でない。非常に嫌われるか、非常に信じられるかのものである。生ぬるをゆるさぬものである。それがクリスト教の真理なる点とここに論ずることは論理上出来ぬが、信仰によって結ばれたる果を見るときに誰が神によって偉でなかったか。クリスチャンはちっとも偉いものではない。皆、栄光を主に帰する。己れは僕たることを以てよしとし、聖者のためなら地獄へでも行く。どんな平凡な生涯にても最大の自由のある、希望ある、讃美ある生涯を送るものである。凡人崇拝でも所謂英雄崇拝でもない。神讃美の外なきものである。これは本当に真剣にならなければわからぬこと。

秋骨氏曰く、現実と理論はとかくあてにならぬものと云って、クリスト教の公布は偶然にして、また理屈なものとなしている。キリスト教は理屈や理論か。彼はこれで日本の立派な文士だ。驚いた。今の日本の文士にろくな奴は居らぬ。またこれを歓迎して読む社会はなおさらろくでなしばかりだ。

敵はの如く多くある。よし、敵の多ければ多いほどよい。敵を皆呑みつくしてやる。何ぞおそれん。己れの罪にかつて泣かざる傲慢な、彼等は皆亡びの道へである。

主イエス・キリストの愛を知らざるか、我はかく汝等を敵とするも、「敵を愛せよ」と云われた主の聖旨に真剣に従わんとするものである。汝等のために主に従いて苦しき十字架を負わんとするものである。このことは決して僕は汝等に一言も云うことは出来ぬ。ただこのことは主にお願いして主の御前にかく歩んで、僕は消えるばかりである。クリスチャンの涙を知らざるか。誰か「我は汝等のために十字架を負わん」と云う真のクリスチャンが居るか。またかく云われて感謝する世の人がいるか。主は曰い給う、

「我に従わんと思うものは己が十字架を負いて従え」

と。それでこそクリスチャンは行く。涙の果はいかに結ぶか。それは主におまかせするばかりである。世のためのクリスチャンの涙はクリスチャンの義務である。クリスチャンの心のおくからせざるを得ざる義務である。かかることは不信の徒にはなせない、有難い秘密である。

実際、僕は世のために毎日どれくらい考えさせられるか。そのために自分の義務を忘れてはならない。勉強をしよう。もう書きつづけるをやめる。書きたいことは絶えないが。

もう一言云う。金のによってすべてのこと、ものを評価する現代人、物質によってすべてを見て行く現代人、枝葉の理屈ばかりこねまわして真理かと思っている現代人、禍なる哉！　禍なる哉！　恋愛と生活のことばかり云わしている現代人！　己れの内なるものに泣かざる現代人！　禍なる哉！　禍なる哉！　やきつくす火よ、彼等をすべてやきつくし給え。

信仰を以て聖書を読まないのなら読まざるをよしとすと、僕は言うであろう。なまぬるの偽善者、すべての批評家、評論家、「ひっこめ」である。

神様、願わくは主の聖戦の勇士たらしめ給え。僕の出来る限りの力で僕の分を全部聖戦のために用い給え。として聖戦にれたくございます、最も内的の意味に於てのみ。一日一日を主の忠実なる僕の生活らしくなし給え。それのみに歩ましめ給え。しかれども、現代は私、之を憂えざるを得ないのであります。「私、立たざるを得ざるとき」に救い給え。アーメン。「汝は人なり」と云い給う御声がいたします。願わくはっかりと私の分をなさしめ給え。アーメン。真剣の意味にて誠に誠にゴルドンやリヴィングストーンの如く地上にたおれたくございます。我が兄、我を愛して「主に従えよ」と無言の死。主にならいて愛を──十字架を──追ってゆきました。願わくは、信仰によりて我もまた！　貴き御名によりて誠に聞き上げ給え。アーメン。

僕の心臓、強い。しかし精神的に（但し生理的に）打撃をうけている。これから１ヶ月なまけ気味でも仕方がない。すこしのんきになってすっかりなおそう。僕は身体でめぐまれていないことは決してない。思索をすこしやめよう。おだやかな日をいただこう。世の中のことはすこし離れて居よう。──随分言葉がみだれた。ゆるしてくれ。ただ、基は一つである。それをいつも望んでいる。睡眠をよくとろう。ところが大分、赤ん坊に邪魔される。だけれども、それ以上にのんきで征服してやろう。

観察が鋭くなっているので、色々のことにその背後まで推察するので書きたいことが多くあるが、多くよすことにする。これも一つの神経衰弱かも知れない。大事なことばかりを見て、あとはよしとしよう。

今日から今週中に藤井先生の「ルッターの生涯及び事業」（トマス・リンゼー）をしっかり読もうと思う。ルッターにならって「親愛なる教師」は僕に、佐藤先生、藤井先生である。否それ以上とさえ云いたくあるのは、内村先生である。しかし内村先生は僕を御存じないこと勿論である。いとも敬愛する先生方よ、願わくはたすけ給いて、第二の国民のために僕をたたせ給え。

ああ、ルッターが決然として修道院に入ったのは２２才に満たんとせるときであった。僕も今２２才に満たん途上にある。彼に倣いて主の僕たらんとするもの私である。汝よ、心して迷うことなかれ。汝はかの偉大なりしルッターに比しては比ぶべきもない劣れるものである。しかしこの小さな汝にも神様は使命を給い与うのである。汝は汝に与えられる使命に忠実にはげめよ。汝は幸にしてえらばれたるものである。これは汝がもっとも確信して言い、且つ神に深く深く感謝すべきところである。どうか汝よ、ルッターに倣いて雄々しく戦えよ。全うせよ、死ぬまで。アーメン。

彼の修道院入りはそれ自身、あやまっていた。しかしその熱烈なる至聖は遂にこの修道院入りをしてあやまりしものとはしない果を結んだ。それはやはり正しき道であった。たとえ、「愛する父よ、汝は遂に正しかりき」と後にルッターを言わしめたりとするも。

クリスチャンの一生は悔改である。「あらんとしてあらんとする」者である。

１９２５年１２月８日（火）

半晴。高等学校の３年からか、大学の１年からか、とにかく兄上の大学の１年即ち１９１７年の１２月３０日から正式に旧約聖書を創世記から読みはじめたことを聖書の第１頁によって見ると、１９１７年から兄上は新生に入ったと見ることはあやまりない。兄の２３の歳である。否、高等学校３年の末にはそろそろ新生の暁をのぞんで居られた様である。それは大学に入るにあたって親類中のものを、ことに叔父叔母たちも交じって、テーブルをかこんだことがあった。そのとき兄上は一場の厳粛な懺悔めいたと云うか、新生の希望に輝けると云うか、演説をされたことをおぼえている。

１９１７年の夏は即ち片瀬の夏で、この時すでに著しきものがあった。僕は小さいながら、それをおぼろながら知った。

昨晩はまた兄上、大学時代の活発な兄上に会った。それは妙な夢である。おそらく同心町時代二階で共に勉強（机をならべて）したことを想いおこしたのであろう。二人は一つの下宿をかりてそこで勉強しようと云うのである。それでこれから一寸二人で上京すると云うのである。汽車の切符を兄上のもかってあげた。二人で乗りこんだ。車中のはなしが実にこの上もなく愉快だった。それで夢はとぎれた。車中の話にやはり僕は大学のことを話さざるを得なかった。そしたら兄上は、

「英語は今そんなにやらなくてよいだろう。むしろ棄てておけ。独乙語を今の二倍も三倍もやらなければ駄目だ」

と云った。僕はいたく励まされた。

松濤、学校の帰りに寄ってくれる。今日は割引券をもらって来てくれた。それから記念写真（３年の）を試験後撮るとのこと。僕は加入出来ない。残念だがやむを得ない。

散歩する。隆ちゃんもついて行く。帰りは疲れてすっかり僕におぶさった。それでも息切れがしなくなった。

「ルッターの生涯」藤井先生、実に新しき心地を読む。益々ルッターのルッターたるところを知って嬉しくあった。１０月８日の晩から丁度２ヶ月になる。この２ヶ月の苦しくも幸なりしよ。

神様、ああ、お父様、この頃の新聞は何でありますか。ああ、その信仰なきサタンの子らよ、彼等はいかに禍なる哉。願わくは、私をしてかかる社会にしっかり御手にすがりて歩かしめ給え。願わくは、信仰の勇者としてあくまでも戦わしめ給え。アーメン。

１９２５年１２月９日（水）

快晴。願わくは、独文科に向かわしめ給え。

「ヱホバは只にてかれを導きたまへり。はこれとともならざりき」（申命記32･12）

今朝起きんとするまぎわ、僕は池にて亀をえた夢を見た。そして間もなく夢から覚めた。亀はそのとき僕の手にあった。これ何を意味するかを知らない。思いもよらざる亀を池から得たこと、必ずしも偶然のこととは思われない。ただちてあらんのみ。

「ルッター研究」１２月号来る。クリスマス。「すべては主基督の故である」、アーメン。

藤井先生に手紙を出す。丁度４枚書いてレターペーパーがなくなった。最初に書いたのが藤井先生で、最後にまた藤井先生であった。僕の独文科志望に関して。

僕は佐藤先生のお手伝をするとお約束した。そして僕はまたどうしても藤井先生のお手伝をしなければならぬ身である。願わくはよく使い給えと祈りまつる。

＊　　　　　　　＊　　　　　　　＊

**〔小池辰雄日誌 Ⅹ 1925.12.10～1926.6.3〕**

「なんぢら互にを負へ、而してキリストのを全うせよ。」（ガラテヤ6･2）

……〔独文省略〕……

「主は我らの爲にを捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」（ヨハネ一3･16）

１９２５年１２月１０日（木）

晴。

「なんぢら互に重を負へ、而してキリストの律法を全うせよ。」（ガラテヤ6･2）

１９１９年５月３０日の兄上の日記より。

「辰さんが母様のお言いつけをすなおにうかがわず、ぐずぐずして居るので僕は武田へ代わりにおつかいに行く（兄のよきわざ）。武田へ行く位、苦にもならない。苦にならぬところのいつかは訳のわかる青年になる事もあろうと思えば（兄の信仰）、そのために一つの手段の極くはしくれとして栄である（兄の愛）。只、辰さんが母様のお心を了解しないと云う事は、是は明瞭に苦痛である。さりながらあの苦痛はこらえて受けねばならない（兄の忍耐）。僕が幼き時は辰さんより更に悪質であった。文字通りに僕は罪人である、悪人である。我を自ら罪人というは決して名誉でもない。謙遜でもない、想像でもない（兄の悔改）。事実である、歴史である。確かな経験である。その罪を今は我が身に感ぜねばならない（兄の体験）。静かにうけて僕に神の光の許されし如く辰さんにもかは彼の光の入れらるる事を願うのみである（兄のお祈り）。」

僕のために、お忍び、お祈り下さった兄上よ、兄上の愛の、お祈りの聴かれたのを感謝して下さい（兄のお祈りの聴かれたこと）。僕も涙を以て兄上と父なる神とに感謝し奉ります（感謝！涙！讃美！）。アーメン。

１５２０年１２月１０日、この日は何であるか。ルッターは、午前９時、「偽キリストの教会」を焼くを見んため、ヴィッテンベルクの学生を招致した。

“Quia tu conturbasti Sanctum Domini,

 ideoque te contubernet ignis aeternus.”

〔註：「汝神の聖徒を苦しむる如く、今や尽きざる火汝を苦しめん」、ルッターが破門状を焚くときに発したラテン語の言。著作集第７巻『聖書の人ルター』「10．破門」の項参照〕

“ ”〔“Te deum laudamus”（われら神であるあなたを讃えん）〕459。

第１頁、Wunderglaube〔奇蹟への信仰〕。

積もり積もってついに来るべき時が来た。断乎として起つべき時が来た。この重大な日に、基督者にとって重大な日に、僕は日記第１０巻、１２５０頁に達した。兄上の愛と祈りが聴かれつつあるをこの身に深刻に感ずる。深く感謝しまつります。どう考えても大学文科行きは僕に動かすべからざるものとなった。その外的の理由は至って弱きものである。僕は法科向きの性質をもって居ないこと。語学が比較的すきなこと。只これだけである。天秤にかければ、６分４分と云った様なものである。しかしである。もし僕にこの信仰の召しがなかったら、僕はおそらく親や親切のお言葉に動かされて法科に行ったであろう。法科と云い文科と云い、この色彩の濃からざる僕にはそんなに選ばれた道ではない。むしろ本来の性質は理科向きであったらしい。しかしそれは身体のことを考えたりしてやめたのであったが、そんなことは今問題でない。高校文科に来たこと、しかも英語が好きであったのに独文科に来たこと（実さんのおすすめ、その当時の目的とはちがって来たが、独文に入ったことは恵まれたことであった）。それから病気をしておくれたこと。それが信仰への道であったこと。それから色々の啓示と思われること、霊感。それは僕の信仰を助けたのでなくして、信仰から当然信じられたことであった。自分の計画の破られること、そのときにそこに本当に聖旨のうかがわれたこと。ことは小さなもの、人には話してもわからないような小さな日常のことが段々、信仰より信仰への道の確証となってくれた。そして、波はあったがとにかく、今日ここまで来た。「ここまで来た」のは決して決して僕の力でなかった。ただ信頼のみが運んでくれた。神様と云う船から垂れた綱であるから、キレッコないもの、キレタと思うときは自分の手がゆるんだときである。──によってのみ。とにかく神の御眼にはなはだ恥ずべきながらここまで来た。もう僕は離れるには自分のあまりに弱いのに戦慄して離れることが出来ぬ。この最大のお方に信頼してあやまりなし。絶対になし。光明の讃美の国へ！

それで僕はとにかく、かくして文科へ行き、そしてどんな仕事をさずけてくださるか全然知らない。またどんな苦しみが来るかも全然知らない。ただ行く。神様が文科でいいだろうと言われるから、ゆく。その外に本当に理由はない。これはこの春からの静かなお話によってだんだんはっきりとうかがった御声です。これはちっとも自分の考えでない。美わしく飾って言ったのでもない。事実ありのままである。こんなことは旧い僕にはあり得ぬ経験である。行く！と云うときに、信頼！と云うものがある。それがなければ行けない。

僕はとにかく一生何もしなくてよいのだ。またお金も少しも貯めなくてよいのだ。世人に何も貢献しなくてもよいのだ。ただ一つなすべきことがある。それは信仰の歩み、と云うことだけである。教師で田舎に一生をおくることしか出来なかったら、それでも一向さしつかえないのだ。ただ信仰の歩みだけが重大だ。これが出来なかったら、大臣になろうが、そんな外的なことは何の効にもならぬ。むしろ禍である。それは死であるから、神の御国へ行けないから。能力が教師だけなら、それで有難く信仰の一生を終るべきである。神様はよろこんで迎えて下さる。過分のことは罪悪である。聖旨にあらざることを強いてなすは罪悪である。亡びである。すべて聖旨なさせ給え、導き給え、罪をゆるし給えである。これが一生の、一日の、貴き基調にして全部である。クリスチャンとはこの外の何ものでもない。主よ、願わくは導き給え。アーメン。

絶対の信頼に汝は勝利を確信せよ。汝しこの確信なくばよせ、なんじはぐずぐずのあたりさわりのない道へ行け。しかれども、信頼し奉りて勝利を確信せば、敢行せよ。ただ敢行あるのみ。勇猛に進め、「おそるる勿れ」と主は云い給う。そこに絶大の力を主は与え給う。然り、汝の行くべき道は春の野路ではない。冬の寒風の暗夜である。おそるべきたる道である。峻厳なる険路もある。何が来るか一切わからぬ辛い道である。そこを通らなければ汝は輝きの国へ到達すること絶対に不可能である。しかしこれを耐え得る唯一のものがある。それは信頼の驚くべき手である。汝はこの道を春の野の路の如く独り、それとも多くのこの世の子らと漫歩するのではない。汝はこの道を独りで到底行き得ない。ただ信頼の手によって導かれて行き得る。そして、この聖手はどんな外敵も決して之をおかし得ざるあたたかきしっかりした聖手である。それにさえ汝がよれば、汝は路にたおれるとも何のおそるることも遺憾なことももない。

ああ、主よ、我が主よ、こんなことがこの世のどこにありましょう。こんな感謝がこの世のいかなるところに帰せられましょう。ただ主にのみよりて、我はゆく。願わくは、たすけ給え、導き給え。アーメン。

讃美歌213、214、215、217、219、223、224、228、232、233、234、235、310。

１９２５年１２月１１日（金）

晴。昨夜、片山博一様に書翰を書いて、今朝投函。午前、病院へ行く。脈１２０、熱７度４分。自分ではそんなにわからなかったが、熱いとは思っていた。午後から３時間ほど寝た。気持が回復した。身体の弱いのに今日は泣きそうになった。しかしエホバ、我が神の恩寵の御声に希望に燃えた。マルコ伝を通読してことに終りに至りて勝利の声に血がわいた。信仰によってのみ聖書は読むべきこと。その他の心にては、聖書は読まるべからざるものたること。クリスチャンの生命は一つに信仰によってなることを強く強く教えられた。復活し給えり、生きて在まし給う、再臨し給う。マーラナサ！　アーメン！

詩篇１２９篇に至る。この秋、新約聖書を殆ど全部読む。黙示録がのこっている。聖書を読まん！　このことが読書の第一のこと。

詩篇、３篇ずつ（朝）。旧約聖書、５章ずつ(晩)。新約聖書、２章ずつ（昼）。これだけは読んだ。そしてこれを続ける覚悟である。

僕、ここによいことを学んだ。即ち、将来のプランをたてることは大体のけんとうだけで、あとは思い煩わぬこと。そして即ち、毎日、一日の事のみ。

旧約聖書、３９書、　９２９章、１２５８頁。

新約聖書、２７書、　２６２章、　３６８頁。

合計、　　６６書、１１９１章、１６２６頁。

「叔母様

玆に１９２５年を送ろうとするにあたりまして敬愛する叔母様に一言筆執りたくなりました。この暫らくよき沈黙をもたせて下さいましたことを感謝し奉ります。

　思い出すのは去年のクリスマスであります。会員にあらざる僕をクリスマスの節日に入れて下さるかとおそるおそるうかがいましたのに、無条件でゆるして下さいました。生まれて初めて本当のクリスマスらしいクリスマスを戴きました。かつお祭さわぎのアメリカ式のクリスマスは最もクリスマスに遠きものであります。厳粛なものでありました。内村先生は何を云われましたか、とくに青年、労働者に（私達のために）感謝と希望に溢れてよき一夜を戴きました。燃ゆる信仰と深き親しみを先生から直接うけたのを感じました。その感謝なりし夕が再び迎えられようとして居ります。

　「主基督の降誕は我らの誕生よりはるかに嬉しく迎えられる」

　「主基督の降誕なかりせば、此の人生はどうであろうか！」

　「基督なかりせば、余は無神論者であったかも知れぬ」（ルッター）

佐藤先生（日本のルッター研究者第一人者）のお言葉を僕達の言葉として言い得る様になったとは、奇蹟でなくてなんでありますか。自分は毫も悟ったのでも偉いのでも何でもありません。ただ云うことの出来るのは、神様が捉えて下さったからであります、と云うこれだけであります。

　新生ようやく３年になろうとする今日、顧みまして、その歩みの弱さに何も云うことが出来ません。もし神様がゆるして下さると云うことがなかったならば、僕はいかなる道にそれたか知りません。しかれどもであります。彼は呼び求めるものを見棄て給う神ではありません。あらゆる罪にもかかわらず、ここまで来させて下さいました。神様と云うあやまりなき大船に信頼のみが僕をつないで居りました。その信頼と云う綱もその大船から垂れたキレッコない綱でありました。そしてああこの綱がきれそうに感じたときは、僕は自分の手がゆるみそうになって、あわや海中に残されんとしたときでありました。自分の独りで歩み得ない弱さを知りつつも、信頼しきれない弱さに泣かなければなりませんでした。そしていつも泣かなければならないのでありましょうか。神様はしかし決して自らきよくなれと云い給わず、かく苦しみのうちに歩みつつも歓喜のあるは何でありましょう。

　「主、生まれ給い、我等の罪のために十字架にあがり給い、復活し給いて、今生きて在まし給い、やがて来り給う（マーラナサ！）」

の驚くべき信仰を下さったのでなくて何でありますか。ああ信仰によって基督者は何ものによっても束縛されざる自由なものであります。ただこの信仰のみが人を義とすると言い給うのであります。「罪人にして義人」、これはいかなる哲学も証明できません。ただ啓示と体験による信仰のみが然り！アーメン！と云います。

　叔母様、どうか、これらのことを僕自身を毫も考えることなくお聞きください。そしてまた、僕も僕自身を全然別としてお話ししたいのであります。もしこのために叔母様が僕の信仰をどうこうとおほめになったら僕は泣きます。私達は常にクリスチャンたらんとするものでございます。それはクリスチャンはとまっていません。いつも動いて動いて居りますから。そしてまたこれはその中に驚くべき休息を戴いて居ります。逆説の如くしてそうでなく、神秘説の如くしてそうでないのでございます。」

かく書いて来てあまりに叔母様に対する態度のいかに信仰とは云え、不遜なるに気がついてやめることにした。日記にはさんで置く。願わくは、神よ、叔母様に信仰を与え給え。純福音の信仰を与え給う。兄、このことを祈りて去り、僕、このことを地上に天上と共に声を合わせて祈り奉ります。貴き御名により、アーメン。１９２５年１２月１１日夜１０時。辰雄。〔叔母様あての手紙貼付〕

１９２５年１２月１２日（土）

晴。暖かし。少々熱っぽく、室に閉じこもる。しかし、山田先生にお礼に行かなくてはならないので、カステラ一箱持って行く。読書と睡眠の外、何もないけれど、眼には見えざる賑やかさ。ヒルティー、ケーベル、兄上等が僕と共に居たからである。ケーベル先生は慕わしき哲人であった。それは彼がクリスチャンたらんとして居られた（実は本当の基督者であったと信ず）からである。僕はもっとケーベル先生が何を云って居られたかを、小品集３冊を読んで知りたい。そしておそらく最後にのこるものはやはり僕が今もっているケーベル先生に対する敬愛を裏切るものでないと信ずる。哲学に非常によいところがある。真面目なところ、冷静なるが故によきところもある。しかし僕はどうしても哲学者にはなり得ない。強き信仰の勇者たりたい、そればかりである。しかし哲理は哲理で尊重したい。そこに矛盾はないと思う。それはもケーベル先生が立派な哲人で信仰を有して居られたこと（本当の哲学はかかる信仰にまで導くと云おうか、かかる信仰と相容れないことは決してないと云おうか）のすこし前後と云おうか、１、２と云おうか──を異にするものとなりたいのである。勿論、哲学も、他のあらゆる僕の知識も僕を評価する上に於て一つの価値もない。否、かく云ってはまだ不十分である。すべて僕に価値はない。ただ僕の価あるものと云えば、それは神様が下さった信仰それのみである。そしてその信仰によって生きるそのことのみが価値あることである。何となれば、信仰は永生を得させるからである。そして僕の信仰は理想主義によるそれでない。純福音の基督教によるそれである。そしてこの結果を神にゆだねる。すべてのとにかくあやまりにあらざる信仰の中どれが本当に神に近かりしかを、そして最も近かりしものに最も喜びの大なるものをいただくであろう。これについて僕達人間は毫もしてはならない。真剣に僕はこれを云う。ただみこころならん日を忍耐をもって待つのみである。マーラナサ！〔主よ来りたまえ！〕　アーメン！

はいつわりなり。美色は呼吸のごとし。

「はいつはりなり はのごとし ヱホバを畏るる女はられん」（箴言31･30）

今日、之をある人に向かって言いたかった。と云うよりも、つくづく之を感じて、聖書の御言葉がありがたくあった。これは女の人に対するよき箴言たると共に、彼女等にライツェン〔誘惑〕される男にとって──もしその男が志あるものなら──よき誠の言葉である。僕は誘惑的の女を見る毎にこれを思い出すと云ってよいと思う。そしてそのときいかに虚栄の彼女等があわれに見えるかよ、はかなく見えるかよ、まるで幻灯にうつし出されて画がやがて消え行く如く。そしてその外観の美の中に僕は醜悪を見て、たえがたくなることさえある。

それでも彼女のために祈りたい。どうか神を畏るる女となって下さいと。そのいつ聞かれるかは知らず。これは僕の愛の義務である。そしてこの義務はどうしても棄ててならないものである。それは基督が云われたからである。僕がこれが出来なかったら、人を救への道に導く（外的の意にあらず）たり得ないし、これまて基督者たらんこと、たることに反する神のよろこび給わざるところなる故に。

神よ、祈りたきこと多くあります。感謝したきこと多くあります。すべてこれを知り給う神よ、願わくは、時々に僕の小さな祈りに応え給え。感謝を受け給え。生活はただ心の中にあります故に。信仰に於ては心、愛に於てはよき業。これを毎日毎日の不断のこととなさしめ給え。アーメン。

この秋は　はかりしことの　成らずして

　　みこころ知りし　みめぐみなりき。

クリスマス　クリスマス来ぬ　クリスマス

　　奇しきみ星は　今もみちびく。

この二首（歌でもないかも知れぬ、しかし心は歌にて）昨夜眠りにつきて、眠られずして瞑想にふけりて、ついに出でたる感謝と希望の声であった。今夜これを思い出して書く。とかく希望の声であった。今夜、これを思い出して書く。とかく眠る前に美わしき考えのうかぶものであるが、翌朝書きしるしさんとして忘れたこと何度であるか。それはどうしても思い出せないことがある。いずれにしろかかることは非健康的な場合が多く、やめんと思う。そしてこの頃、１０時！には、神が寝ろ！と言われる心地して、どんなことをしかけていても筆をやめ眼を休ませて寝ることにした。これは非常によいことである事を知った。とにかく１０時！に寝ると云う規則は、よくよく特別のことのあらざる限り実行することにした。朝は６時から８時まで、いつ起きてもいい。この頃は大抵７時半である。睡眠時間を多く得んために、昼、せっせと働く──今は勉強すること──ことは非常によいことである。よくこのことを知りつつも出来ないのが人である。それを喜んですることを得させる力を与えて下さるのが神様が下さる信仰の力である。有難きこと限りなし。

１９２５年１２月１３日（日）

晴。聖日。午前７時起床。午前、ルッターについて読む。聖書と独乙語讃美歌。政美兄上がいかに藤井先生の「ルッター」から感動されるところの大であったかを察する。「ルッターは味方であった」と言われたことは、本当にルッターはよき友であったことを示している。そしてルッターの如く確く信仰に歩んだ。

今日、友、松濤が訪問した。彼の友情にいつも感謝せざるを得ない。彼の健康体を見て、

「然り！　彼の如く健全に働くものはかくの如き健康を戴く」

と云う生きた教訓を与えられた。そして今日は彼との会話中、はからざりき!?　彼に僕は一つの虚言を云った。僕はそれをとりけさなかった。悪の二重となってしまった。その虚言の原因は小さき虚栄であった。大なる罪をおかした。虚栄はいかに小なりと云えども大罪の卵である。今ここに日記に書かざるを得ない。それは僕がいかにもケーベル先生を独力で解した様に話したことであった。ケーベル先生はまだ僕にはそんなにわかっていない。ただ僕の信仰が彼を洞察したところから、かなり独断的に言ってしまったのである。それは不遜である。虚栄である。つつしまざるべからずと信仰の薄はかなるに枕辺に、神に謝してここに記す。願わくは、ゆるし給え。

１９２５年１２月１４日（月）

晴。神経衰弱なることを自ら感じた。しかし「恐るる勿れ」と言い給う主に信頼し奉る。この外に何もない。「るるなかれ！」、アーメン。主よ、救い給え。アーメン。

１９２５年１２月１５日（火）

晴。起床８時。朝食。支度。室内整頓。カバンと風呂敷にダンテの胸像をつつんで、１１時半、青木を辞す。車中独り。向かい合いに坐った人はどこかの教会のクリスチャンで、小さい女の子と二人で讃美歌を歌っていた。女の兒は空ゆく雲を見て、云った。彼女は小さき詩人であった、曰く、「あの雲は天国から来たんでしょう、オ父サン！」と云った。それから彼女がなにげなくうたう讃美歌に「キリストの十字架」とか、「キリストの血」とか云う文字がくりかえされている。僕はそれを聞いて居て宗教的情緒に駆られた。そして独り黙祷した。そのクリスチャンなる父親は所謂クリスチャンらしい。だから僕は話す気にもならなかった。

午後４時半、帰宅。母上が寝て居られるので驚いた。そしてすこし痩せて居られるので心配した。そして祈らざるを得なかった。僕のことについては皆様に大きな顔は出来ないが、どうか信仰だけを見て下さいと云いたい。僕はなにはともあれ、信仰の勇者を以て貫かんばかりが最大の、そして全体の願いである。僕はこの外になにもなくてよい。ただ信仰の勇者たらんのみである。

１９２５年１２月１６日（水）

晴。午前８時起床。お昼までうち。お昼から出掛けた。新しき家へ。大工が盛んにやっていて、うれしく感じた。二階！　同心町以来待ちのぞみし二階の書斎。それが今度与えられんとしている。実に有難く思う。ことに郊外とあっては──富士が見える連山を望み得る。井ノ頭の森もよく見える。祈りの場所と直観した──天の兄上政美よ、よろこびうたえ。新家庭がここに独立せんとしている。兄上よ、このすべてを兄上に感謝し奉る。兄上その犠牲となり給いしにより僕たちはかくある。それを兄上は預言された。ああ偉なるかな兄上よ、僕をどうか兄上の願いにかなう小政美たらしめ給わんよう祈り給え。涙と感謝にあふれて。アーメン。

１９２５年１２月１７日（木）

晴。午前８時起床。平口さんにお会いする。午後、武田へ行く。宣ちゃん今朝から９度の熱。叔母様、宣ちゃんの御看病であった。お気の毒である、お二人とも。宣ちゃんの持病であろう。これを神様の聖旨と云われた叔母様は正しい。普通の方にはなかなか言えない。叔父様と叔母様から５円ずつお歳暮をいただく。夜１０時にねる。

１９２５年１２月１８日（金）

晴。今日はその１０円で早速、銀座へ飛ぶ。黒崎幸吉先生の『ルーテル　ガラテヤ書註解釈』（教文館）を買う。ケーベル先生小品集続、続々編の２冊を買う。ケーベル先生の小品集３集（丸善）を勝った。ギリシヤ語新約聖書を買う（これは昨夜、神楽坂）。ギリシヤ語新約聖書のLexicon〔辞書〕を買う（教文館）。『パレスチナの面影』（黒崎先生）を買う（これも昨日、向山堂）。Bekehrung eines Gottlosen Ein Bekenntnis von Kokichi Kurosaki.（これも昨日、向山堂）。Die Räuber : Schiller〔群盗：シラー〕も買う（丸善）。１９２６年のカレンダーを買う（教文館）。夜の星美わし。桐陵会の招き、引越につきことわる。

１９２５年１２月１９日（土）

何をしたか忘れた。

１９２５年１２月２０日（日）

晴。新町の藤井先生のお家でお集まりあり。今日は１９２５年のクリスマスをここで戴いた。ヘブル書２章１０節。

「それ多くの子を光栄に導くに、その救の君を苦難によりて全うし給うは、の物の帰するところ、万の物を造りたもう所の者にしき事なり。」（ヘブル2･10）

涙がこぼれた。聖書のこの頁は知らぬ間に涙で一杯であった。主イエス様のお苦しみなんか何でもないからであった。そして罪！罪！ああこの罪！と思ったからであった。この秋、しばしば罪のために泣いたことも今日は一時にまた思われて、限りなく己れのに感ぜしめられた。そして十字架がはっきりと見えて来た。感謝のほか何ものもなかった。藤井先生の声はもう先生の声ではなかった。それは天より来たれる恩寵の声であった。アーメン！であった。１４人位の人々もそこには居なかった。涙はふくことも出来なかった。最後のお祈りのときに涙はすっかりとまって、深き感謝のにあった。希望の光に浴して居た。クリスマスは階下のお室でテーブルを囲んで、飾りは一つもなくしてなされた。御馳走は天丼とお菓子と水菓子であった。讃美歌の最後は６８、みそらにきらめくを歌った。自己紹介をした。去年のクリスマス（柏木、内村先生のお家）と殆ど同じことを言わざるを得なかった。

１９２５年１２月２１日（月）～１２月２６日（土）

いつ何をしたか忘れたが、２２日には兄上の墓詣をなした。墓前にガラテヤ書２章、ヘブル書１０章を読んだ。兄上と共にアーメンを云った。兄上は静かに僕のために祈って下さった。僕も言い難き苦しみと歓びとのうちにお墓を去った。

１９２５年のクリスマスの記念のために本をかなり買った。２０円位買った。ボェーメルのLuther〔ルッター〕を神田の古本屋で見つけたのは嬉しかった。３円５０銭だった。英訳のLuther’s Works〔ルッターの著作〕（２冊）が１２円はほしかったがお金がなかった。レン子さんに「ドンキホーテ」を買ってクリスマスの贈物とした。僕としはは新約聖書物語か旧約聖書物語かを買って上げたかったのだけれども、基督者でない斎藤さんであるからよした。

一夜、伝道講演の夢を見た。僕も熱して語るときは強きことを感じた。

一夜、兄上に遭う。勉強せよと云われる。

一夜、ドイツ語の会話をグンデルト先生の女の子とした夢を見た。

１９２５年１２月２７日（日）～１２月３０日（水）

晴。新しき家を与えられて転宅する。感謝であった。夜１０時、消灯前独り静かに感謝の祈りと聖書テサロニケ前後書を読んだ。

待たれし日であった。晴天で万事好都合。自動車４台で全部運ばれた。

斎藤様とお別れするのはと感ぜられた。僕は二夏お世話になり、色々とお世話になり、一番懐かしく思われる。基督者でなくて一向差支えない。否、一般のクリスチャンよりよっぽどよい。健全なる日本人である。日本人らしき人である。かかる親切な方は珍しいと云ってよいだろう。お金は本当にキレイで、実際今の世にはなかなかないと思われる。

藤井先生のお宅のクリスマスと、斎藤さんとのお別れ、新しき家の出来たのと、これはこの年の暮の忘れられざる出来事である。

空気清澄、西北両方はことに展望よく、関東の連山との峯〔富士山のこと〕、夕陽に映ゆその景、なんとも云えない。それをながらにしてのぞみ得るとは何と有難きことであるか。汽車や電車が２、３町の南方を横ぎる。畠は遠くつらなっている。井ノ頭の森がのぞまれる。今夜は満月である。霧の深かった昨（２６日）の夜などは〔宵の明星、金星のこと〕の外、一星も見えず、たる大海か、大平原の感ありて何とも言えない雄大さである。漠然たることは勿論、武蔵野原頭に立って文字通り云い得るの観がある。一詩なかるべからずであるが今はない。

自分の家を有ったのは初めてだと母様は云われた。僕も云う、同心町以来二階を憧れていたのが今日ここに得られて有難いと。

政美兄上も井ノ頭の森の見えるこの西荻窪に家をつくろうとは夢にも思って居られなかったろう。どんなに天にて僕達と共に喜んで居られ、また平安あれと祈って居られることだろう。然り、僕は基督者たらん、本当に。よき書斎をいただいたからにはよく勉強しよう。兄上のお写真を西の本棚の柱に懸けた。それは同心町の二階の本箱に対せしめて。兄上はこの本箱を毎日見て居られる。僕と龍二兄上の机の前の柱の上に主キリストの幼き御姿がかけられた。また、メイ・フラワー“May Flower”の帰り行くを岸にて見送る清教徒たちの画がそれに対してかけられた。これも兄上の好きな画であった。──１２月３０日記。

１９２５年１２月３１日（木）

１９２５年最終の日、大晦日。終日、家に居て新宅の整頓。除夜の鐘の音を聞くに至る。夜の静けさ。満月として照っている。薄霧がひくくたれこめている。月光は富士が白く映っているのには驚いた。何たる奇観ぞ。思わず三嘆の声を発せり。太白〔金星のこと〕西空ひくく輝きて灯火の如し。二階よりの景、武蔵野の原！　これを何といいて嘆美し、何と云いて感謝し奉りてよいかわからぬ。若し文章家なら、若し詩人なら、どんなに美しい文がつづれるか知れない。

１９２５年もついに行く。テニソンの “Ring out, Ring in” をむ。一家は感謝と喜びに満つ。１９２５年は逝けり。汝に感謝することのあまりに多きに涙なり。ここに云わずただ厚き涙を以て。

〔註：参考、"Ring Out, Wild Bells" by Tennyson、遠山顕氏訳〕

 　　**Ring Out, Wild Bells** **打ち出せ、荒ぶる鐘よ**

Ring out, wild bells, to the wild sky, 打ち出せ、荒ぶる鐘よ、荒れ狂う空へ
 The flying cloud, the frosty light: 　　疾駆する雲と、凍てついた月へ
 The year is dying in the night; 　　行く年は夜の中で死にかけている
 Ring out, wild bells, and let him die. 　　打ち出せ、荒ぶる鐘よ、そして死なせるのだ。

Ring out the old, ring in the new, 打ち出せ、古きものを、打ち入れよ、新しきものを
 Ring, happy bells, across the snow: 　　響き渡れ、幸せの鐘よ、雪の世界に
 The year is going, let him go; 　　この年はもう行く、行かせるのだ
 Ring out the false, ring in the true. 　　打ち出せ、欺瞞を、打ち入れよ、真実を。

Ring out the grief that saps the mind 打ち出せ、心萎えさせる悲しみを
 For those that here we see no more; 　　もうここから消えた者たちへの
 Ring out the feud of rich and poor, 　　打ち出せ、富者と貧者の確執を
 Ring in redress to all mankind. 　　打ち入れよ、全人類の救済を。

Ring out a slowly dying cause, 打ち出せ、かすれゆく大義名分を
 And ancient forms of party strife; 　　そして古めかしい政争を
 Ring in the nobler modes of life, 　　打ち入れよ、より高貴な生き様を
 With sweeter manners, purer laws. 　　より優しき礼節と、より純粋な法律を。

Ring out the want, the care, the sin, 打ち出せ、欲望、心労、罪を
 The faithless coldness of the times; 　　時代の不実な冷たさを
 Ring out, ring out my mournful rhymes　　打ち出せ、我の陰気なこの韻詩を
 But ring the fuller minstrel in. 　　が、打ち入れよ、より十全な吟遊詩人を。

Ring out false pride in place and blood, 打ち出せ、地位と血筋へのおごりを
 The civic slander and the spite; 　　巷間の中傷と悪意とを
 Ring in the love of truth and right, 　　打ち入れよ、真実と正義への愛を
 Ring in the common love of good. 　　打ち入れよ、善への普遍の愛を。

Ring out old shapes of foul disease, 打ち出せ、古き悪疾を
 Ring out the narrowing lust of gold; 　　打ち出せ、金塊への深まる渇望を
 Ring out the thousand wars of old, 　　打ち出せ、一千の古き戦争を
 Ring in the thousand years of peace. 　　打ち入れよ、一千年の平和を。

Ring in the valiant man and free, 打ち入れよ、勇敢で自由な人を
 The larger heart the kindlier hand; 　　より大きな心とより温かい手の
 Ring out the darkness of the land, 　　打ち出せ、この地の暗闇を
 Ring in the Christ that is to be. 　　打ち入れよ、救世主となる者を。